

## 『佛說大安般守意經』における 「本文」と「註」の解明\*

釋果暉

法鼓佛教學院助理教授

### 摘要

『佛說大安般守意經』に関連する研究は、最初期の中国仏教あるいは格義仏教を解明するため、重要な手がかりの一つだと思われる。『佛說大安般守意經』の研究に画期的な展開をもたらしたのは、大阪河内長野市にある金剛寺で発見された所蔵本『安般守意經』である。勿論、同寺でともに発見された安世高訳の『十二門經』、『仏説解十二門經』も『佛說大安般守意經』への解明に大変役に立つのである。また、謝敷の『安般序』と道安の『安般注序』には、『佛說大安般守意經』（あるいは『小安般經』）と深い関係のある『修行道地經』も言及されている。さらに、「大小安般經」は竺法護訳『修行道地經』の「數息品」に相当する禪觀を説いた重要な文献だと荒牧典俊氏も示唆していた。したがって『佛說大安般守意經』を研究するためには、『修行道地經』を重視しなければならない。

『佛說大安般守意經』の全文からみると、經文と註には大変混沌たる構文が交じり合い、如何に「本文」と「註」を見分けるかは、至難な課題である。両經の間にはどんな関わりを持っているか、と筆者自身が両經の内容を一文字一文字対比しながら、見分けようと努めてきたのみならず、より厳密に精査しなければならないとも痛感している。そこで、『新出安般經』と類似する『佛說大安般守意經』の箇所を「本文」、「本文」に対する解釈を

---

\* 收稿日期：2008.08.26，通過審核日期：2008.10.23。

「註」と設定する。さらに『佛說大安般守意經』『新出安般經』『修行道地經』の内容について論究し、この仮説を入念に検証することにする。

検証した結果、『佛說大安般守意經』の本文と見なされた大部分は、『新出安般經』にも出てきたことがわかった。ところが、両經における該当する文には、同意味の部分、あるいは交互に対応する箇所が明らかにされるとしても、使われた用語が異なっているのも否めない実情である。陳慧の手によって書かれた「注義」などが現れる前に『佛說大安般守意經』は既に存在しているし、その原型は安世高が『新出安般經』から抜き出した抜粋を敷衍した中間的であり、且つ「口解」のような文も含まれた『安般經』であったことも確認できる。

## 【目次】

- 一、「安般守意」と「六事」
  - (一)『新出安般經』との比較
  - (二)『新出安般經』の「六事」
  - (三)「有四種安般守意行除兩惡十六勝」
  - (四)「兩惡」と「數息品」の「二瑕」
  - (五)「四種」と「數息品」の「四事」
  - (六)「十六勝」と「數息品」の「十六特勝」
  - (七)「安般」の定義
  - (八)「安般守意」「六事」の「本文」と「註」
- 二、「數」
  - (一)「數」の「本文」と「註」
- 三、「相隨」
  - (一)「相隨」の「本文」と「註」
  - (二)「不待念」
  - (三)「家中念」と「家外念」
  - (四)「四禪」
- 四、「止」
  - (一)「止」文の「本文」と「註」
- 五、「觀」
  - (一)「觀」の「本文」と「註」
- 六、「還」
  - (一)「還」の「本文」と「註」
- 七、結論

關鍵詞：安世高、經注不分、六事、大小安般經、數息品

## 一、「安般守意」と「六事」

学者によって『佛說大安般守意經』を解明されようとする試み自体が、<sup>1</sup> 大変重要視される証拠である。金剛寺所蔵本『安般守意經』<sup>2</sup>（以下『新出安般經』）の発見こそ、この解明の重要な手がかりともいえるだろう。同時に、『陰持入經』におけるパーリー文献の発見も解明の糸口になる。<sup>3</sup>

言い換えれば、『新出安般經』は「道安録」に載せた『小安般經』<sup>4</sup>（すなわち『安般守意經』）だという可能性は非常に高い。この論点はすでに取り上げられている。<sup>5</sup>

拙論では一つの問題提起として『新出安般經』の本体は、「道安録」のいう『小安般經』に該当するかどうか、改めて論究することにする。また、『佛說大安般守意經』と『新出安般經』における「六事」・「数」をはじめ、「還」にいたるまでの内容を比べてみたら、『佛說大安般守意經』における「本文」と「注」<sup>6</sup> についての見分けをすることは欠くべからざるとも思われる。

---

1 学者らは、この研究を重要視している。林屋友次郎（1938）、大谷哲夫（1968）、吉岡義豊（1968）、荒牧典俊（1971,1993）、デアヌ（1992、1997）、川島常明（1976）、村木弘昌（1979）、宇井伯壽（1983）、松田慎也（1983、1989）、杜繼文（1998）、洪鴻榮（2002）などを参照。

2 新発見『安般守意經』、『十二門經』、『仏説解十二門經』の写本は『報告書』の pp. 205-228 に掲載されている。

3 発見に関して、梶浦晋（2001）、落合俊典（2001、2004）、デアヌ（2003）などを見る。同時に、『陰持入經』の発見も安世高訳經への解明に大変役にたつ。Zacchetti Stefano（2002b）を参照。

4 『出三藏記集』「安般守意經一卷（安録云小安般經）」、T55, no. 2145, p. 5c23.

5 Zacchetti Stefano, “On the Authenticity of the Kongōji Manuscript of An Shigao's Anban Shouyi jing 安般守意經,” pp. 157-158; デアヌ フロリン, 「新発見の安世高訳『安般守意經』金剛寺本」, p. 33; 落合俊典（2002, pp. 31-36）

6 「此經按經首序及見經文，似是書者之錯經注不分而連書者也。義當節而注之。然往往多有不可分處，故不敢擅節，以遺後賢焉。」 T15, no. 602, p. 173a25-28.

## (一) 『新出安般經』との比較

『佛說大安般守意經』における「安般守意」と「六事」との本文は、次の①②の二段落である。①段は「安般」の定義である。『佛說大安般守意經』の全文中には「六事」の短文が数多く出てくるが、<sup>7</sup> 筆者には②段しか本文とは考えられない。その見方について、後述した二つの文にまとめる

①聽説，安般守意，何等爲安，何等爲般，安名爲入息，般名爲出息，念息不離是名爲安般，守意者欲得止<sup>8</sup> 意。<sup>9</sup>

②數息爲單，相隨爲複，止爲<sup>10</sup> 一意，觀\*爲知意，還爲行道，淨爲入道也。<sup>11</sup>

『新出安般經』における「安般守意」と「六事」の文は次の段落である。

①何等爲安，何等爲般，何等爲安般守意，入息爲安，出息爲般，隨是法意，是名爲安般守意。②安般守意亦爲六事，何等爲六，一數，二隨，三止，四觀，五還，六淨。③數屬二事，一爲計出入息，二爲舍家中念。④隨亦助成二事，一爲入息出息受想，二爲舍家外念。⑤止亦成二事，一爲定，二爲斷一切念。⑥觀亦屬二事，一爲入息出息分別但相觀。⑥a 二爲意念所憂想<sup>12</sup>。⑦還亦屬二

---

<sup>7</sup> T15, no. 602, p. 64a14-b26.

<sup>8</sup> 止 = 上<sup>㊦</sup>。

<sup>9</sup> T15, no. 602, p. 165a4-7.

<sup>10</sup> 爲 = 而<sup>㊦</sup><sup>㊦</sup><sup>㊦</sup><sup>㊦</sup>。

<sup>11</sup> T15, no. 602, p. 165a28-b1.

<sup>12</sup> 想 = 相<sup>㊦</sup>。

事，一爲還五陰，二爲知見滅盡。⑧淨亦屬二事，一爲捨縛結，二爲見淨。<sup>13</sup>

引用文中の「⑥觀」における「分別但相觀」は歴然と「分別俱相觀」の誤写だとわかる。というのは、詳述している「觀」の段落には「分別俱想觀」<sup>14</sup> という用語がみられるからである。その上、同文中の「意念所憂想」は「意念所受想」の誤写であるとも見られる。理由は、「觀」について述べる段落では「受意念法想」<sup>15</sup> という用語も載せてあるわけである。

『佛說大安般守意經』における「安般守意」の④の文「聽說，安般守意，何等爲安，何等爲般，安名爲入息，般名爲出息。念息不離是名爲安般，守意者欲得止意。」は、『新出安般經』における「安般守意」の①の文「何等爲安，何等爲般，何等爲安般守意，入息爲安，出息爲般。隨是法意，是名爲安般守意。」とほぼ対応できる。<sup>16</sup> さらに、『佛說大安般守意經』における「六事」の⑥の文たる「數息爲單，相隨爲複，止爲一意，觀爲知意，還爲行道，淨爲入道也。」は、格義的な解釈であるとうかがえるが、『新出安般經』における②「六事」の文たる「一數，二隨，三止，四觀，五還，六淨。」に対する解釈であるとも推定できる。その理由は次の如くである。

<理由 1> 「數・隨・止・觀・還・淨」という「六事」に対するそれぞれの「事」の解釈文は、殆ど⑥文より前の段落に納められており、<sup>17</sup> この統一された形式を整える段落は後日に整理された文であると思われる。それで、⑥の文の配置からみると、『新出安般經』の②の「一數，二隨，三止，

<sup>13</sup> 同TEXT, 62ff-71ff.

<sup>14</sup> 同TEXT, 82ff.

<sup>15</sup> 同TEXT, 81ff-82ff.

<sup>16</sup> Hunglung Hung, "The New Found Kongō-Ji Manuscript An Ban Shou Yi Jing and T602 Fo Shuo Da An Ban Shou Yi Jing—Analysis of T602 to Distinguish the Original Scripture from its Commentary—," pp. 114-119 (L) を参照。

<sup>17</sup> すなわち「守意六事爲有……已滅盡便隨道也」の段落である。T15, no. 602, p. 164a24-b26.

四觀，五還，六淨。」に対する解釈であるとも考えられる。

<理由 2> 『佛説大安般守意經』における㉔「安般守意」<sup>18</sup>と㉕「六事」の文の間には、<sup>19</sup>「十六勝」<sup>20</sup> が挟まれている。「十六勝」の語は『新出安般經』ではまったく触れられていないから、「十六勝」の段落は後に加えられた文であると推断できる。『佛説大安般守意經』の「十六勝」の段落を外せば、㉔「安般守意」の文は、直ちに㉕「六事」の文と繋がっている。同じく『新出安般經』にでる①「安般守意」の文は②「六事」の文と繋がっている。したがって、『佛説大安般守意經』における㉕「六事」の段落は、『新出安般經』における②「六事」の段落の解釈文に相違ない。

『新出安般經』における「六事」、すなわち③④⑤⑥⑦⑧は殆ど同経の「数・随・止・觀・還・淨」のそれぞれの段落に含まれている。<sup>21</sup> 『佛説大安般守意經』では『新出安般經』の③④⑤⑥⑦⑧段落に該当する文は見当たらないが、次の『佛説大安般守意經』の「觀」「還」「淨」の文中には、『新出安般經』の⑥觀・⑦還・⑧淨とほぼ同趣旨の文が見られる。

心意受相〔者。〕……以識因縁爲俱相觀〔者。謂〕識知五陰因縁，出息亦觀入息亦觀，觀者謂觀五陰，是爲俱觀。<sup>22</sup>

是爲還五陰也，何等爲便見滅盡處。<sup>23</sup>

第六淨棄結者。<sup>24</sup>

何等爲淨，〔謂〕諸所貪欲爲不淨，除去貪欲是爲淨。<sup>25</sup>

18 T15, no. 602, p. 165a4-7.

19 T15, no. 602, p. 165a28-b1.

20 T15, no. 602, p. 165a7-28.

21 因TEXT, 71ff-122ff.

22 T15, no. 602, p. 167a4-8.

23 T15, no. 602, p. 167a28.

24 T15, no. 602, p. 167a19.

25 T15, no. 602, p. 167b29-c1.

## （二）『新出安般經』の「六事」

『新出安般經』における「六事③④⑤⑥⑦⑧」と同じ形式の文は、『大毘婆沙論』<sup>26</sup>と『阿毘曇毘婆沙論』<sup>27</sup>にも見られる。『新出安般經』の③「家中念」および④「家外念」の「念」の原語は *vitakka* である。<sup>28</sup> すなわち、「念 *vitakka*」は『大毘婆沙論』の「尋」および『阿毘曇毘婆沙論』の「覺」の同義語である。これについては、三の「相隨」の節に改めて論究する。

なお、『大毘婆沙論』と『阿毘曇毘婆沙論』における「六事 *ṣaṭ-kāraṇa*」<sup>29</sup>の文は、『新出安般經』における「六事③④⑤⑥⑦⑧」の文とほぼ同趣旨であるとも考えられる。

## （三）「有四種安般守意行除兩惡十六勝」

『佛說大安般守意經』における「有四種安般守意行除兩惡十六勝」の文については、もっと論究する必要がある。その「四種」「兩惡」「十六勝」の形式は、『修行道地經』の「四事」「二瑕」「十六特勝」と極めて類似している。しかし「十六特勝」の文中にでる「不棄捐所思喘息自知」は高麗藏（㊦）には存在しているものの、趙城金藏（㊧）宋元明三本（㊨）宮本（㊩）宋磧砂藏（㊪）明南藏（㊫）明嘉興藏（㊬）には一向見当たらない。<sup>30</sup> さらに、康僧会訳の『六度集經』（一の〔六〕に参照）にも出てこないため、

<sup>26</sup> T27, no. 1545, p. 135a29-b9.

<sup>27</sup> T28, no. 1546, pp. 105c25-106a1.

<sup>28</sup> Zacchetti Stefano, "The Scripture on the Twelve Gates Preached by the Buddha," p. 232.

<sup>29</sup> 玄奘の『俱舍論』と真谛の『俱舍釋論』では、「六事」の代わりに「六因」を使う。T29, no. 1558, p. 118a23; T29, no. 1559, p. 270b21。AkBh. から原語は、*ṣaṭ-kāraṇa* であるとも判る。

<sup>30</sup> 大正蔵の明版は実は「黄檗版」を指すが、本論文の明版は永樂北蔵（大明北蔵）を採用する。



『佛說大安般守意經』の「十六勝」には一つの「勝」が欠けていることが確認できる。それ故、「不棄捐所思喘息自知」の文は高麗蔵の編集者によって後日に加えられたものであると指摘したい。

道人行安般守意欲止意，當何因緣得止意，聽說安般守意，何等爲安，何等爲般，安名爲入息，般名爲出息。念息不離是名爲安般，守意者欲得止<sup>31</sup>意。在行者新學者，有四種安般守意行，除兩惡十六勝即時自知，乃安般守意行令得止意。何等爲四種，一爲數，二爲相隨，三爲止，四爲觀。何等爲兩惡，莫過十息，莫減十數。何等爲十六勝即時自知，(1) 喘息長即自知，(2) 喘息短即自知喘，(3) 息動身即自知，(4) 喘息微即自知，(5) 喘息快即自知，(6) 喘息不快即自知，(7) 喘息止即自知，(8) 喘息不止即自知，(9) 喘息歡<sup>32</sup>心即自知，(10) 喘息不\*歡心即自知，(11) 内心念萬物已去不可復得喘息自知，(12) 内無所復思喘息自知，(13) 棄捐所思喘息自知，(14) 不棄捐所思喘息自知，<sup>33</sup> (15) 放棄軀命喘息自知，(16) 不放棄軀命喘息自知，是爲十六即時自知也。<sup>34</sup>

「數息品」中に「數息守意有四事行無二瑕穢十六特勝」<sup>35</sup>の文が書かれているし、安世高訳の『道地經』一卷が『修行道地經』の初5品、第22品、及び第24品に相当する七品から成っていることは、すでに指摘されている。<sup>36</sup>すなわち両經は同一の原本のテキストからでた同本異訳であるように思われる。その中では、『道地經』における「神足行章」の文と『修行道地經』における「神足品」の文にある対応関係も窺い知る。関連するキーワードから

31 止 = 上<sup>㊦</sup>。

32 歡 = 觀<sup>㊦</sup><sup>㊦</sup><sup>㊦</sup>。

33 [不棄……自知] 九字一金<sup>㊦</sup>三<sup>㊦</sup>宮<sup>㊦</sup>佛<sup>㊦</sup>佛<sup>㊦</sup>，棄 = 弃<sup>㊦</sup>。

34 T15, no. 602, p. 165a3-19.

35 T15, no. 606, pp. 215c21-216a20.

36 佐藤泰舜 (1929, p. 6)

みると、安世高訳の「止意」は竺法護訳の「寂（然）」、安世高訳の「聽說」は竺法護訳の「解説」に該当している。竺法護訳の寂観は止観の意味であることから、「寂（然）=止意」の原語は *samatha* であると容易に推定できる。

行者持何等行得止意，報，若干因行止意，聽說要止意。二因縁方便行得止意，一者念惡露，二者念安般守意。<sup>37</sup>

其修行者，何因專精求入寂然，無數方便而逮於寂，今取要言而解説之。因二事致，一惡露觀，二曰數息守出入息。<sup>38</sup>

安世高訳の『是法非法經』に「聽說」の訳語が見出されるし、慣用した訳語を頻繁に使った訳文から“*desessāmi*”という「聽說」の原語も見分けられ、同本異訳たる『中阿含經』第 85 經（東晋・瞿曇僧伽提婆訳）では「我今爲汝説」の「説」と訳されている。“*desessāmi*”は“*deseti* 説示”の第一人称の直説法未来形 (*fut.*) 動詞であるから、「私は説示するのであろう」に訳される。これは『修行道地經』の「當解説」の語と一致していることは確認できる。また、漢語の用語に「聽說」を「よく言うことを聞く」と解釈する例もあるため、安世高が“*desessāmi*”を「聽說」と訳したのはなんら不自然ではなかろう。<sup>39</sup>

上述した『道地經』の「神足行章」における「止意」の段、<sup>40</sup> および同本異訳の『修行道地經』の「神足品」における「寂然」の段からみると、<sup>41</sup> キーワードである「止意=寂（然）」「聽說=解説」のような対応関係が見だされる。同じく『佛説大安般守意經』の「有四種安般守意行除兩惡十六勝」

<sup>37</sup> T15, no. 607, p. 235c14-17.

<sup>38</sup> T15, no. 606, p. 212a11-13.

<sup>39</sup> 詳しい論証は、Hunglung Hung, “The New Found Kongō-Ji Manuscript An Ban Shou Yi Jing and T602 Fo Shuo Da An Ban Shou Yi Jing—Analysis of T602 to Distinguish the Original Scripture from its Commentary—,” pp. 114-119 (L)を参照。

<sup>40</sup> T15, no. 607, p. 235c14-17.

<sup>41</sup> T15, no. 606, p. 212a11-13.

の文と、「數息品」の「數息守意有四事行無二瑕穢十六特勝」の文からも、このような対応語がみられる。言い換えれば、『佛説大安般守意經』の「有四种安般守意行除兩惡十六勝」文は「數息品」の「數息守意有四事行無二瑕穢十六特勝」の文と共に、同原本のテキストから訳出されたものである。なお『道地經』と『修行道地經』とを対照してみると、安世高がしばしば「偈頌」を省略したような例も見られる。

「數息品」の中に出た三箇所の「於是頌曰……」という偈頌を略すれば、『佛説大安般守意經』における「有四种安般守意行除兩惡十六勝」の文は、『修行道地經』における「數息守意有四事行無二瑕穢十六特勝」と完全に対応していることは一目瞭然だった。

次に、『佛説大安般守意經』における「兩惡」「四種」「十六勝」について、『修行道地經』における「二瑕」「四事」「十六特勝」と比較しながら、それぞれの内容を検討してみよう。

#### (四)「兩惡」と「數息品」の「二瑕」

『佛説大安般守意經』は「兩惡」について次のように述べている。

何等爲兩惡，莫過十息，莫減十數。<sup>42</sup>

問何等爲莫過十數莫減十數，報息已盡未數是爲過，息未盡便數是爲減，失數亦惡不及亦惡，是爲兩惡。<sup>43</sup>

『佛説大安般守意經』の「兩惡」は、「過」と「減」の二つのことをさしている。「過」とは、數息するときに、実際に息を行つたのに、修行者が自ら未だ數えていないことをいう。つまり、修行者は「十數」まで巧く數えた途端、実に息がすでに「十」を超えたことを指す。「減」は、「過」の手順

<sup>42</sup> T15, no. 602, p. 165a10-11.

<sup>43</sup> T15, no. 602, p. 165a19-21.

と逆である。また、『佛說大安般守意經』の「両悪」は『修行道地經』の「二瑕穢」にも該当し、「長」と「短」との二つのことを指す。

何謂二瑕，數息或長或短是爲二瑕。<sup>44</sup>

『佛說大安般守意經』に述べたとおりに、「長」「短」を見分ける境い目は「十数（息）」である。『修行道地經』の数息の文を調べてみたら、すぐ見分けられことである。下線した後述の文は偈頌である。

何謂數息，……而使至十，……至得十息心不中亂，於是頌曰，自在不動譬如山，數出入息令至十，晝夜月歲不懈止，修行如是守數息。<sup>45</sup>

さらに、『修行道地經』は「長」「短」について次のように解釈している。下線をされた文は偈頌である。

何謂數長，適未有息而預數之，息未至鼻而數言二，是爲數長，於是頌曰，尚未有所應，而數出入息，數一以爲二，如是不成數，何謂數短，二息爲一，於是頌曰，其息以至鼻，再還至於臍，以二息爲一，是則爲失數。<sup>46</sup>

すなわち、数息するときに、修行者は、未だ息の尽きていない内に、先に「一」を数え、息がすでに尽きたら、「二」を数えはじめる。つまり、息が「十」数に達するときに、実際に修行者は「十より長い（多い）」数を数えてしまう。このことを「長」という。「短」はその逆である。

<sup>44</sup> T15, no. 606, p. 216a11.

<sup>45</sup> T15, no. 606, p. 216a29-b6.

<sup>46</sup> T15, no. 606, p. 216b24-c1.

したがって、『修行道地經』でいう「長」は、『佛説大安般守意經』の「減」に該当する。

一方、『修行道地經』で称する「短」は、『佛説大安般守意經』の「過」に該当する。つまり、『佛説大安般守意經』の「兩惡」は『修行道地經』の「二瑕穢」と同趣旨であることが判明できる。

### (五)「四種」と「數息品」の「四事」

『佛説大安般守意經』にでる「四種安般守意行」の四種というのは「數・相隨・止・觀」の四種のことである。

何等爲四種，一爲數，二爲相隨，三爲止，四爲觀。<sup>47</sup>

しかし、『修行道地經』での「數息守意有四事行」は、長文中の「數息・相隨・止觀・還淨」を指す。

何謂四事，一謂數息，二謂相隨，三謂止觀，四謂還淨。<sup>48</sup>

また、「四事」の偈頌にも「數息・相隨・(止)觀・還淨」が見られる。

於是頌曰，當以數息及相隨，則觀世間諸萬物，還淨之行制其心，以四事宜而定意。<sup>49</sup>

「數息・相隨・止觀・還淨」という四事は「數息・相隨・止・觀・還・淨」の六事を示す素朴な原型である。このことについては印順法師もすでに指

---

<sup>47</sup> T15, no. 602, p. 165a9-10.

<sup>48</sup> T15, no. 606, p. 216a7-8.

<sup>49</sup> T15, no. 606, p. 216a8-10.

摘している。<sup>50</sup>「数息・相随・止観・還浄」の四事から「数息・相随・止・観」へと分化していくことも考えられるが、『修行道地経』は『道地経』とともに同原本のテキストからでた異訳である以上、同テキストにおいて、このような分化はまず考えられない。

『佛説大安般守意経』の「四種安般守意行」には、なぜか「数息・相随・止・観」しか出てこないのか。恐らく安世高が「四事」に対する定義を簡略化しようとするために、「四種」と「四禅」とを組み合わせ「還浄」を省略したと考えられる。いわゆる格義的な手法であるともいえよう。「数随止観」と「四禅」との関係について“三の「相随」”の節でさらに詳しく論究する。

## （六）「十六勝」と「數息品」の「十六特勝」

康僧会訳の『六度集経』<sup>51</sup>には『佛説大安般守意経』における十六勝から引用された略式の文が見られる。恐らく、『佛説大安般守意経』の「十六勝」には一つの「勝」が欠けているため（一の〔三〕に参照）、康僧会は自ら第 11 番目の自惟萬物無常喘息自知を新たに加えたに違いない。

『佛説大安般守意経』における十六勝の文をまとめてみたら、次のような四つの組が見られる。<sup>52</sup> その内には〔(5) 快・(6) 不快〕〔(7) 止・(8) 不止〕〔(9) 歡心・(10) 不歡心〕〔(13) 棄捐所思・(14) 不棄捐所思〕〔(15) 放棄軀命・(16) 不放棄軀命〕のようなセットの訳文が見られる。しかし、『修

<sup>50</sup> 印順法師：「四事は含得六事的；一般的四事與六妙，從此分化出來。可說四事（含六事的）是概略的古說，六門是精析的新義。」『說一切有部為主的論書與論師之研究』，p. 404。

<sup>51</sup> 「思十六事，一其心得禪，何謂十六，1. 喘息長，2. 短即自知，3. 喘息動身即自知，4. 喘息微著即自知，5. 喘息快，6. 不快即自知，7. 喘息止，8. 走即自知，9. 喘息歡，10. 感即自知，11. 自惟萬物無常喘息自知，12. 萬物過去不可追得喘息自知，13. 內無所思，14. 棄捐所惟喘息自知，15. 放棄軀命，16. 不棄軀命喘息自知。」T3, no. 152, p. 40c2-9。

<sup>52</sup> T15, no. 602, p. 165a11-18.

『行道地經』の十六勝の文には、〔(5)・(6)〕〔(7)・(8)〕〔(9)・(10)〕〔(13)・(14)〕〔(15)・(16)〕のように〔…・不…〕の対応関係は見出されない。安世高が十六勝の文を簡略化したと推定される。これも格義的な解釈であるといえる。

『佛説大安般守意經』	『修行道地經』
(1) 喘息長即自知。	①數息長則知。
(2) 喘息短即自知。	②息短亦知。
(3) 喘息動身即自知。	③息動身則知。
(4) 喘息微即自知。	④息和釋即知。
(5) 喘息快即自知。	⑤遭喜悅則知。
(6) 喘息不快即自知。	⑥遇安則知。
(7) 喘息止即自知。	⑦心所趣即知。
(8) 喘息不止即自知。	⑧心柔順則知。
(9) 喘息歡心即自知。	⑨心所覺即知。
(10) 喘息不歡心即自知。	⑩心歡喜則知。
(11) 内心念萬物已去不可復得喘息自知。	⑪心伏即知。
(12) 内無所復思喘息自知。	⑫心解脫即知。
(13) 棄捐所思喘息自知。	⑬見無常則知。
(14) 不棄捐所思喘息自知。	⑭若無欲則知。
(15) 放棄軀命，喘息自知。	⑮觀寂然即知。
(16) 不放棄軀命喘息自知。	⑯見道趣即知。

## (七)「安般」の定義

様々な「安般」に対する定義が諸辞書に書いてある。例えば、『パーリ語辞典』<sup>53</sup>では次のような定義が見られる。

<sup>53</sup> 水野弘元、『パーリ語辞典』。

Ānāpāna : 安般、安那般那、出入息

Āpana : 出息、入息

Āssāsa : 呼吸、出息、蘇息、安息

Passāna : 入息、〔実は（出息）〕

また、『漢訳対照梵和大辞典』<sup>54</sup> では次のような定義をする。

Ānāpāna : 漢訳入出息、音写安般、安那波那

āna : 漢訳入息、吸気

apāna : 漢訳出息、出気

āśvāsa : 漢訳、入息、蘇息

praśvāsa : 漢訳入息、出息

さらに、M. Monier-Williams の *Sanskrit English Dictionary*<sup>55</sup> (1999) には次の定義も見られる。

āna: exhaling the breath through the nose ; inhalation, breath inspired

āpān: to breathe out, expire

āśvāsa: breathing again or freely, taking breath

praśvāsa: breathing in, inhaling

なぜこのような混沌とした定義がでたのか。『清浄道論』によれば、「安 āna」・「般 apāna」とは、Ⓐ「出息」、「入息」と「入息」、「出息」との二種類に分け、定義される。

しかも、ブッダゴーザの『清浄道論』<sup>56</sup> では、「律の注釈書」はⒶの定

<sup>54</sup> 荻原雲来, 『漢訳対照梵和大辞典』。

<sup>55</sup> M. Monier-Williams, *English-Sanskrit dictionary*.

<sup>56</sup> Tattha dighaṃ vā assasantoti dighaṃ vā assāsaṃ pavattayanto. Assāsoti bahi



義を、「経の注釈書」は㊸の定義を主張している。

㊸の定義の根拠は、胎児が母胎より出生するときに最初に出息をするという説によるものである。㊹の根拠は㊸とは逆である。ブツダゴザは㊸「律の注釈書」の定義を正統的な説であると言い立てる。

	安 āna	般 apāna
㊸類	「出息」	「入息」
㊹類	「入息」	「出息」

北伝の『順正理論』では次のように説かれている：「凡そ数息の時は、当に先ず入を数うべし。初生の位には入息先に在り、乃至、死時には出息最後なるを以てなり。是の如く生死の位を覺察するが故に、無常の想に於いて漸く能く修習す。」<sup>57</sup>

すなわち、これは先に述べた㊹類の論説である。『大毘婆沙論』、『俱舍論』、『順正理論』、『顕宗論』、『雜阿毘曇心論』などの論書は、殆どこのように㊹類の定義をしている。これは説一切有部の伝統的な主張である。

次に『佛説大安般守意經』と『新出安般經』における「安般」の定義を比較してみると、両經はともに㊹類の定義にあたと判明した。

『佛説大安般守意經』における「安般」の定義には次の文が見られる。

何等爲安，何等爲般，安名爲入息，般名爲出息。<sup>58</sup>

一息亂者是外意過，息從外入故，二息亂者是内意過，息從中出故。<sup>59</sup>

---

nikkhamanavāto. Passāsoti anto pavisanavātoti vinayatthakathāyam vuttaṃ. Suttantatthakathāsu pana uppaṭṭipāṭiyā āgataṃ. Tatha sabbesampi gabbhaseyyakānaṃ mṇṭtukucchito nikkhamanakāle paṭhamaṃ abbhantaravāto bahi nikkhamati. Pacchā bāhiravāto sukhumarajaṃ gahetvā abbhantaraṃ pavisanto tāluṃ āhacca nibbāyati. (Vism. P. 272)

<sup>57</sup> 「凡數息時應先數入，以初生位入息在先，乃至死時出息最後，如是覺察死生位故，於無常想漸能修習。」 T29, no. 1562, p. 674a3-5.

<sup>58</sup> T15, no. 602, p. 165a5-6.

數息所以先數入者，外有七惡，內有三惡，用少不能勝多故先數入也。<sup>60</sup>

また、『新出安般經』における「安般」の定義には次の文も見られる。

何等爲安，何等爲般，何等爲安般守意，入息爲安，出息爲般。<sup>61</sup>  
數爲何等，入息出息數十息，无得過十息，无得減十息，入息至竟投<sup>62</sup> 一、出息至竟投<sup>63</sup> 二、若投<sup>64</sup> 二意誤，更從一投起，若至九投意誤，更從一數起，令莫誤十息入息出息數，是名爲數。<sup>65</sup>

しかし『修行道地經』の「安般」に対する定義は、同經の偈頌と長文からみると、完全に㊤類の定義に該当するとわかった。

何謂爲安，何謂爲般，出息爲安，入息爲般，隨息出入而無他念，是謂數息出入。<sup>66</sup>

其修行者欲求寂，當知安般出入息。<sup>67</sup>

何謂數息，若修行者，坐於閑居無人之處，秉志不亂數出入息，而使至十。<sup>68</sup>

自在不動譬如山，數出入息令至十。<sup>69</sup>

---

<sup>59</sup> T15, no. 602, p. 164c3-5.

<sup>60</sup> T15, no. 602, p. 164c10-12.

<sup>61</sup> ㊤TEXT, 62ff-63ff.

<sup>62</sup> 投＝捉㊤。

<sup>63</sup> 投＝捉㊤。

<sup>64</sup> 投＝捉㊤。

<sup>65</sup> ㊤TEXT, 71ff-75ff.

<sup>66</sup> T15, no. 606, pp. 215c22-216a2.

<sup>67</sup> T15, no. 606, p. 216a5.

<sup>68</sup> T15, no. 606, p. 216a29-b1.

數息意定而自由，數息出入爲修行。<sup>70</sup>

如守門者坐於門上，觀出入人皆識知之，行者如是，係心鼻頭當觀數息知其出入，於是頌曰，譬如守門者，坐觀出入人，在一處不動，皆察知人數，當一心數息，觀其出入息。<sup>71</sup>

尚未有所應，而數出入息。<sup>72</sup>

何謂佛弟子數出入息而得寂然。<sup>73</sup>

一の（三）で論じたように、『佛説大安般守意經』中の「有四種安般守意行除兩惡十六勝」は「數息品」の「數息守意有四事行無二瑕穢十六特勝」の文とともに、同原本のテキストから訳出されたものである。したがって、『佛説大安般守意經』文中の「安般」に対する定義は、『修行道地經』と一致する④類の定義にあたるはずである。しかしながら、『新出安般經』の「安般」の定義とあわせるため、安世高は、④類の定義たる「出息為安，入息為般」を⑤類の定義たる「安名為入息，般名為出息」に入れ替え、あるいは、そのまま『新出安般經』から引用して『佛説大安般守意經』に使われるに違いないと筆者は指摘しておきたい。<sup>74</sup>

## （八）「安般守意」「六事」の「本文」と「註」

まず、『佛説大安般守意經』『新出安般經』における「安般守意」「六事」の文を示す。

---

<sup>69</sup> T15, no. 606, p. 216b5.

<sup>70</sup> T15, no. 606, p. 216b10.

<sup>71</sup> T15, no. 606, p. 216b17-22.

<sup>72</sup> T15, no. 606, p. 216b26.

<sup>73</sup> T15, no. 606, p. 217a28.

<sup>74</sup> Hung, Hunglung, “The New Found Kongō-Ji Manuscript An Ban Shou Yi Jing and T602 Fo Shuo Da An Ban Shou Yi Jing—Analysis of T602 to Distinguish the Original Scripture from its Commentary—,” pp. 114-119 (L) を参照。

㉑聽説，安般守意，何等爲安，何等爲般，安名爲入息，般名爲出息，念息不離是名爲安般，守意者欲得止<sup>75</sup> 意。<sup>76</sup>

㉒數息爲單，相隨爲複，止爲<sup>77</sup> 一意，觀\*爲知意，還爲行道，淨爲入道也。<sup>78</sup>

①何等爲安，何等爲般，何等爲安般守意，入息爲安，出息爲般，隨是法意，是名爲安般守意。②安般守意亦爲六事，何等爲六，一數，二隨，三止，四觀，五還，六淨。<sup>79</sup>

さらに、『佛説大安般守意經』における「安般守意」「六事」の「本文」と「註」の箇所を再検討してみる。

## 1. 『佛説大安般守意經』における「安般守意」の「本文」と「註」について

### (1) 本文について

『佛説大安般守意經』と『新出安般經』とを対照すると、類似する箇所は、次のごとくである。

『佛説大安般守意經』	『新出安般經』
㉑「何等爲安，何等爲般，安名爲入息，般名爲出息。」	①「何等爲安，何等爲般，……入息爲安，出息爲般。」

つまり、『佛説大安般守意經』の㉑「何等爲安，何等爲般，安名爲入息，

75 止 = 上<sup>㉑</sup>。

76 T15, no. 602, p. 165a4-7.

77 爲 = 而<sup>㉒</sup><sup>㉓</sup><sup>㉔</sup><sup>㉕</sup>。

78 T15, no. 602, p. 165a28-b1.

79 ㉒TEXT, 62ff-65ff.

般名爲出息。」は、本文の箇所であることがわかる。

## (2) 註について

すでに考察したように、一の(三)では『佛説大安般守意經』の「有四种安般守意行除兩惡十六勝」の文は、もとより『修行道地經』の「數息品」から引用されたと察する。ところが、安世高は『新出安般經』の趣旨に合致させるために、「數息品」の内容を書き直した。また、同節に論証したように、「聽説」と「止意」は安世高の特有な訳語であり、『佛説大安般守意經』の①文は、安世高自身の解釈に相違ない。

## 2. 『佛説大安般守意經』における「六事」の「本文」と「註」について

### (1) 本文について

『佛説大安般守意經』と『新出安般經』とを対照すると、類似する箇所は、次のごとくである。

『佛説大安般守意經』	『新出安般經』
→①「 <u>數息…相隨…止…觀…還…淨…</u> 」	→②「 <u>…一數，二隨，三止，四觀，五還，六淨</u> 」

つまり、『佛説大安般守意經』の①「數息…相隨…止…觀…還…淨…」は、本文の箇所であることがわかる。

### (2) 註について

①「數息…相隨…止…觀…還…淨…」という本文に対し、「…爲單。…爲複。…爲一意。…爲知意。…爲行道。…爲入道也。」は注釈であると思われる。それ故、「単」、「複」、「一意」、「知意」、「行道」、「入道」は、それぞれ「數息・相隨・止・觀・還・淨」の「註（解釈）」にあたることになる。「數息」とは、修行者が一つ一つの息に気をくばりながら、一つ一つの

「数」を数えていくことである。一つ一つの「息」あるいは「数」は、「単」と解釈される。それに対して、「相隨」とは入息・出息という二つの「息」の動きに注意を払うことで、「数息」の「単」に対して「相隨」は「複」である。また「一意」<sup>80</sup>は、『陰持入經』には6箇所も出てきて、PSSBと対照すると、ekacitta<sup>81</sup>の原語も見出される。その上、「知意」<sup>82</sup>、「入道」<sup>83</sup>、「行道」の語も、安世高の複数の訳経にうかがえる。『長阿含十報法經』<sup>84</sup>では「行道」の語が見られ、maggāはその原語でもある。

要するに、「単」「複」「一意」「知意」「行道」「入道」という「註」は、安世高本人の解釈であると結論して、妥当であると言える。

## 小結

安世高は、『新出安般經』の「①何等爲安，何等爲般，何等爲安般守意，入息爲安，出息爲般，隨是法意，是名爲安般守意。」の文を解釈するため、「數息品」中の「數息守意有四事行無二瑕穢十六特勝」の文を引用した。<sup>85</sup>また、『新出安般經』とあわせようとするのに、「數息品」の「出息爲安，入息爲般」を「安名爲入息，般名爲出息」に入れ替える一方、簡略化するため「四種安般守意」、「十六勝」を格義的に解釈したとも察した。『佛說大安般守意經』の「數息爲單，相隨爲複，止爲一意，觀爲知意，還爲行道，淨爲入

<sup>80</sup> 『陰持入經』：「彼爲止觀俱隨行，一處一時一意。」 T15, no. 603, p. 179b1.

<sup>81</sup> *Peṭakopadesa*, p. 134, 8ff; 13ff; 21ff.

<sup>82</sup> 『佛說大安般守意經』：「自知意以安定。」 T15, no. 602, p. 170c12.

<sup>83</sup> 『長阿含十報法經』：「意在佛信入道根生住無有能壞。」 T1, no. 13, p. 236c12-13；『佛說大安般守意經』：「中信者。謂入道中見道因緣信道。是為中信也。」 T15, no. 602, p. 167a17-18；『阿含口解十二因緣經』：「無有疑便入道。」 T25, no. 1508, p. 53c5.

<sup>84</sup> 「或時行者，已行道生，我已行道來。」 T1, no. 13, p. 237c28. “Puna caparaṃ, Avuso, bhikkhunā maggo gato hoti. Tassa evaṃ hoti- ‘ahaṃ kho maggam agamāsiṃ.” DN, p. 287, 8ff-10ff.

<sup>85</sup> T15, no. 606, pp. 215c21-216a20.

道也。」の段<sup>86</sup>は『新出安般經』の「安般守意亦爲六事，何等爲六，一數，二隨，三止，四觀，五還，六淨。」に対して解釈した文である。『新出安般經』の文は阿毘達磨の形式を持つ。なお、『修行道地經』と違って『新出安般經』は説一切有部の論点を有する。<sup>87</sup>

## 二、「數」

『佛説大安般守意經』における「數」<sup>88</sup>の文は次のごとくである。

①問何等爲數，報數者謂事，譬如人有事更<sup>89</sup>求是爲數罪，道人數福，何以故正爲十，一意起爲一，二意起爲二，數終於十，至十爲竟，故言十數爲福。<sup>90</sup>

②問何等爲莫過十數莫減十數，報息已<sup>91</sup>盡未數是爲過，息未盡便數是爲減，失數亦惡不及亦惡，是爲兩惡。<sup>92</sup>

③家中意欲盡〔者。謂〕六情爲意家貪愛萬物，皆爲意家也。<sup>93</sup>

『新出安般經』における「數」の文は次のごとくである。

<sup>86</sup> T15, no. 602, p. 165a28-b1.

<sup>87</sup> 兩經における部派所属については、さらに別紙で究明したい。

<sup>88</sup> 『法觀經』の一段落の「佛言，第一何以故數息，……爲第一禪。」も、この「數」の注釈文であると見られる。T15, no. 611, p. 240b28-c3。Hunglung Hung, “Continued Study of An Shigao’s Works —The terminology of the *Mayi jing* T732 and the *Faguang jing* T611—,” pp. 122-127 (L) を参照。

<sup>89</sup> 更=便(金)(三)(宮)(囀)(囀)(囀)。

<sup>90</sup> T15, no. 602, p. 165c17-21.

<sup>91</sup> 已=以(金)(三)(宮)(囀)(囀)(囀)\*。

<sup>92</sup> T15, no. 602, p. 165a19-21.

<sup>93</sup> T15, no. 602, p. 166c11-12.

①數爲何等，入息出息數十息。②无得過十息，无得減十息。③入息至竟投<sup>94</sup> 一、出息至竟投<sup>95</sup> 二、④若投<sup>96</sup> 二意誤，更從一投起，若至九投意誤，更從一數起，令莫誤十息。⑤入息出息數，是名爲數，何用是數，但從是⑥斷家中念。<sup>97</sup>

『數息品』における「数」の文は次のごとくである。

○何謂數息，若修行者，坐於閑居無人之處，秉志不亂。○數出入息，而使至十，從一至二，設心亂者當復更數，一二至九，設心<sup>98</sup>亂者當復更數，是謂數息，行者如是晝夜習數息一月一年。○至得十息心不<sup>99</sup>中亂。<sup>100</sup>

『佛說大安般守意經』における「数」の文に関して、a、b1b2、cという三つの説明文が見られる。この三つの説明文は、『新出安般經』における「数」との対応関係を比較してみると、次のようになる。

『佛說大安般守意經』	『新出安般經』
a) 問何等爲數……一意起爲一，二意起爲二，數終於十，至十爲竟。	①數爲何等，入息出息數十息……③入息至竟投一，出息至竟投二。
b) 莫過十數（息），莫減十數。	②无得過十息，无得減十息。
c) 家中意欲盡。	⑥斷家中念。

<sup>94</sup> 投=捉㊸。

<sup>95</sup> 投=捉㊸。

<sup>96</sup> 投=捉㊸。

<sup>97</sup> ㊸TEXT, 71ff-76ff.

<sup>98</sup> 心=使㊸㊸。

<sup>99</sup> 不中亂=中不亂㊸。

<sup>100</sup> T15, no. 606, p.216a29-b4.



## (一)「數」の「本文」と「註」

### 1. 本文についての再検討

上に述べた両經における「數」の文は、極めて類似している。言い換えれば、『佛説大安般守意經』の①・②・③は本文である。

すでに一の(三)で論じたように、『佛説大安般守意經』の「何等爲兩惡，莫過十息，莫減十數。」<sup>101</sup>の箇所は、もとより「數息品」の「何謂二瑕，數息或長或短是爲二瑕。」<sup>102</sup>の箇所と対応できる。しかも、一の(四)で論究したように「兩惡」は「二瑕」とは趣旨が一致しているようにみえるが、対照してみたら、両者の文は明らかに異なっている。というのは、一の(八)の「安般守意」の文と同じように、「兩惡」の文に対し、安世高は「數息品」の「二瑕」の形式を借用、『新出安般經』の「无得過十息。无得減十息」と同じ文である「莫過十數(息)。莫減十數」の内容を取り入れたからである。

### 2. 註についての再検討

#### (1) ①文の「數福」「十數為福」について

『陰持入經』と PSSB とを対照してみると、安世高訳の「福」の語は、*puñña* と *phala* との二種類の原語に還元できると判明した。

taṃ puññānaṃ padaṭṭhānaṃ. Kusaladhammopacayalakkhaṇaṃ  
puññaṃ, taṃ sabbasampattinaṃ padaṭṭhānaṃ.<sup>103</sup>

令墮福處，從清淨行有所入相，是名爲福，令致墮五樂處。<sup>104</sup>

<sup>101</sup> T15, no. 602, p. 165a10-11.

<sup>102</sup> T15, no. 606, p. 216a11.

<sup>103</sup> *Petakopadesa*, p. 129, 18ff-20ff.

<sup>104</sup> 『陰持入經』, T15, no. 603, p. 177c4-5.

Tass'etāni phalāni sāmāññaphalāni ti vuccati. <sup>105</sup>

是名爲行者，爲是是福，是故名爲行者福。 <sup>106</sup>

また、『七處三觀經』<sup>107</sup>では「五福」の語も見られるため、「數」の㉔の「數福」と「十數爲福」の「福」は、「罪」と対照できる。つまり、puñña に該当する意味の語であるとも考えられる。

### （2）㉔文の「兩惡」について

一の（四）ですでに論じたように「兩惡」の趣旨は、『修行道地經』「數息品」の「二瑕」と一致するものの、文の表現とは相違する。<sup>108</sup>『新出安般經』の文と合わせるために、安世高は「莫過十數（息）。莫減十數」に書き直したと推定される。

### （3）㉔文の「家中意」「六情」「貪愛」について

三の（二）で論じたように、『新出安般經』の「家中の念」は、イコール『大毘婆沙論』の「耽嗜依の尋」である。「念（尋）」の語は、「vitakka」の原語に還元できる。なお『佛說大安般守意經』の㉔は、『佛說大安般守意經』の「數息」に対する解釈文の最後の文であるため、<sup>109</sup>㉔の「家中意」は、『新出安般經』の「家中念」と同義語であると思われる。一方㉔の註文の「貪愛」は、ほぼ『大毘婆沙論』の「耽嗜」と同趣旨の語であり、「六情」の語は、安世高訳の『阿含口解十二因緣經』<sup>110</sup>にも見られるから、安

<sup>105</sup> *Petaṅkopadesa*, p. 130, 18ff-19ff.

<sup>106</sup> 『陰持入經』, T15, no. 603, p. 178a13-14.

<sup>107</sup> 「佛便告比丘。五福時布施。何等爲五福。」 T2, no. 150A, p. 878a24。  
“Pañcimāni, bhikkhave, kāladānāni. Katamāni pañca?”

<sup>108</sup> 『修行道地經』では「何謂二瑕。數息或長或短是爲二瑕。」とある。 T15, no. 606, p. 216a11.

<sup>109</sup> 『佛說大安般守意經』の「數息」の段落は、「第一數亦相隨所念異。……貪愛萬物。皆爲意家也。」であると見られる。 T15, no. 602, p. 166b17-c12.

<sup>110</sup> 「六情爲十八種。有識故爲十九根。」 T25, no. 1508, p. 53c13-14.

世高の訳語であると思われる。

『新出安般經』における「数」についての説明は、「數息品」の「数」の文と似通ったところがある。まずは、『新出安般經』の「①數爲何等。入息出息數十息……出息至竟投二。④若投二意誤，更從一投起，若至九投意誤，更從一數起，令莫誤十息。⑤入息出息數，是名爲數。」の文は、「數息品」における「数」の文中の「○何謂數息……○數出入息，而使至十，從一至二，設心亂者當復更數，一二至九，設心亂者當復更數，是謂數息。……○至得十息心不中亂」と類似するような例もうかがえる。

## 小結

『佛説大安般守意經』における「数」の文に関して、①、②、③という三つの段落に説明文が散在しているが、それらの要旨をまとめて対照してみたら、『新出安般經』における「数」の説明文との対応関係が見られる。したがって『佛説大安般守意經』における「数」は、『新出安般經』の「数」の文をもとに広めた解釈である。①、②、③の「本文」と「註」にでた用語を考察してみると、安世高本人の解釈であるとは言える。また「数」の文に関して「數息品」と『新出安般經』は極めて類似しているため、両經が深く関わっていることは言うまでもない。

## 三、「相隨」

『佛説大安般守意經』における「相隨」の文は次の段落に見出される。

相隨〔者。謂〕行善法從是<sup>111</sup>得脱，當與相隨，亦謂不隨五陰六入，息<sup>112</sup>與意相隨也。<sup>113</sup>

---

111 〔是〕—㊦

『新出安般經』における「相隨」の文は次のごとくである。

隨爲何等？入息至意（竟），當隨。莫投一。出息至竟，當隨。莫投二，是名爲隨。何用是隨？但從是斷外念。<sup>114</sup>

『新出安般經』における「相隨」の文の形式は、同經の「數」の文の「③入息至竟投一，出息至竟投二」に類似している。「入息至意」の「意」は、「竟」の誤写であるとみられる。

## （一）「相隨」の「本文」と「註」

### 1. 本文について

上述した両經における「相隨」に関して類似点は次のごとくである。

『佛說大安般守意經』	『新出安般經』
「相隨者…當與相隨…」	「隨爲何等…當隨…當隨…」

つまり、「相隨者…當與相隨…」は『佛說大安般守意經』における「相隨」の「本文」にあたる。

### 2. 註について

『新出安般經』の「(家) 外の念」<sup>115</sup> = 『大毘婆沙論』の「出離依の尋」という対応関係について、次の三の（二）で論じることにする。「五

112 息 = 自<sup>㊦</sup>

113 T15, no. 602, p. 166c12-13.

114 ㊦TEXT, 76ff-78ff.

115 『新出安般經』: 「隨亦助成二事。一爲入息出息受想，二爲舍家外念。」の文があるから、「外念」はイコール「家外念」のである。㊦TEXT, 66ff-67ff.

陰・六入」は「貪愛」の根源であり、「出離」の拠り所でもあるうえで、「五陰・六入に従わず」という「相隨」に対する注釈は妥当であろう。『陰持入經』をはじめ、五陰 pañcakkhandhā、六入 saḷāyatana の用語は安世高の訳した複数の經典にも見られる。それゆえ、『佛説大安般守意經』の「相隨」の註が安世高自らの解釈であるとは推定される。

## (二)「不待念」

①數息以爲隨第二禪，何以故，用不待念故爲隨第二禪也。數息爲不守意，念息乃爲守意。息從外入，息未盡，息在入意在。盡，識在數也。十息有十意爲十絆，相隨有二意爲二絆，止爲一意爲一絆。<sup>116</sup>

前述したように『佛説大安般守意經』における「相隨」の文中には「不待念」の用語が一箇所みられるし、他の文にも一箇所存在する。「不待念」の語は上述した「(相) 隨」の文中の「不待念」とは関わりをもっていないように思われる。

報數息爲墮四意止，何以故，爲四意止，亦墮四意斷，用不待念故爲四意斷。<sup>117</sup>

ところが、次の論証方法から再点検してみたら、「不待念」の語は「第二禪」と結びついていたと思われる。

康僧会の「安般序」<sup>118</sup> では、すでに「數→一禪・隨→二禪・止→三禪・觀→四禪」という「數隨止觀」と「四禪」との対応関係が書いてある。

<sup>116</sup> T15, no. 602, p. 165b14-18.

<sup>117</sup> T15, no. 602, p. 170a19-20.

<sup>118</sup> T55, no. 2145, p. 43a14-b5; T15, no. 602, p. 163a19-b10.

また、『新出安般經』の最後の部分や、<sup>119</sup>『仏説解十二門經』<sup>120</sup>にもこのような対応関係がみられる。

「数随止觀」と「四禪」との対応関係は康僧会あるいは陳慧の解釈であるとデレアヌ フロリン<sup>121</sup> はすでに指摘しているが、これは安世高本人の格義的な解釈であると筆者は言い立てたい。この点については三の（四）の節で論証する。

さらに『佛説大安般守意經』<sup>122</sup>、『新出安般經』<sup>123</sup>にも「六随念」と『三十七品經』との対応関係がみられる。これも安世高の格義的な解釈であるのはいままでもない。つまり、「相隨為四意斷」から「用不待念故為四意斷」という文が成り立つと考えられる。さらに論究すれば、「相隨」は「第二禪」と対応できるから「不待念」を用いていると考えられる。

次の『十二門經』文中には「念待」の用語が出ているし、その上その注釈書と言われる『仏説解十二門經』に「念・待」について対応できる文も見られる。

第一門，有念有待，何以故，意不向聞經故。第二門，但有待，何以故，但有<sup>124</sup>待，不增餘意，亦有餘意故。第三門，爲但有歡

119 『新出安般經』：「師云，數息爲一禪，相隨爲二禪，止爲三禪，觀爲四禪。」因TEXT, 276ff-277ff。

120 『仏説解十二門經』：「數息爲一禪，相隨爲二禪，止爲三禪，觀爲四禪。」因TEXT, 409ff-410ff。

121 Florin Deleanu, "The Newly Found Text of the *An ban shou yi jing* Trnaslated by An Shigao," pp. 170-133 (L).

122 「數息爲四意止，相隨爲四意斷，止爲四神足念，觀爲五根五力，還爲七覺意，淨爲八行也。」T15, no. 602, p. 164b18-19。

123 「師云，數息爲四意止，相隨爲四意斷，止爲四神足，觀爲五根五力，還（爲）七覺意，淨爲八道行。」因TEXT, 278ff-280ff。

124 [有] — ⑩

喜，何以故，但有歡喜，離是念待二事故。第四門，念待歡喜滅，何以故，念待歡喜滅，離是三事故。<sup>125</sup>

第一門，有念有待，何以故不得耶，念故等爲大待<sup>126</sup>，有餘意爲待。第二門，有待爲何等，爲斷諸惡。第三門，有歡喜爲何等，爲斷上頭二事。第四門，一心爲何等，棄上頭三事。<sup>127</sup>

『仏説解十二門經』に「待念」の用語が出てくるから、「待念」はすなわち『十二門經』文中の「念待」と同義語であると考えられる。

一禪何以故聲爲怨家，用待念故。二禪何以故待爲怨家，從禪起用欲故。三禪何以故歡喜爲怨家，用避亂意故。四禪何以故喘息爲怨家，已得四禪。息復促意，未得上第二四門故。<sup>128</sup>

一禪有所念有所待。<sup>129</sup>

『十二門經』と『仏説解十二門經』にでた「念・待」の用語を「vitakka・vicāra」という原語に還元できると Stefano Zacchetti はすでに指摘している。<sup>130</sup>「vitakka・vicāra」の旧訳は「覚・観」であるが、新釈では「尋・伺」と訳される。『十二門經』の本文には「四禪」の用語が出てこないものの、その内容および『仏説解十二門經』の四禪に対する解釈からみると、「念・待」と「四門」「四禪」との間には、次のような対応関係がみられる。

第一門	第二門	第三門	第四門
一禪	二禪	三禪	四禪

<sup>125</sup> 『十二門經』，圓TEXT, 344ff-350ff。

<sup>126</sup> [大] 一㊸。「大待」は「念」の誤写と見られる。

<sup>127</sup> 『仏説解十二門經』，圓TEXT, 367ff-371ff。

<sup>128</sup> 『仏説解十二門經』，圓TEXT, 478ff-482ff。

<sup>129</sup> 『仏説解十二門經』，圓TEXT, 494ff。

<sup>130</sup> 一の(二)の註22を参照されたい。

有念有待	（無念）有待	無念無待	歡喜滅
------	--------	------	-----

禪定 dhyāna と「念待（すなわち覺觀あるいは尋伺）」との対応関係によって、四種禪 catukkajjhāna と五種禪 pañcakajjhāna といわれる二種類の禪定が大まかに分けられている。パーリの『清淨道論』<sup>131</sup> にこの二種類の禪定も見られる。

四種禪の特徴をまとめると、次のようになる。これは、一般に知られる四種の禪<sup>132</sup> のことである。

初禪	第二禪	第三禪	第四禪
有覺有觀	無覺無觀	喜の遠離	捨念清淨

『阿毘曇毘婆沙論』にも四支禪・五支禪の名称が見られる。次の文中の「上三禪」はすなわち二禪・三禪・四禪のことを指す。「五支禪」とは初禪・中間禪・二禪・三禪・四禪のことである。要するに、中間禪とはパーリ

<sup>131</sup> 四種禪の定義：根本定 appanā-samādhi: Ettāvatā ca pan'esa vivicc'eva kāmehi vivicca akusalehi dhammehi savitakkam savicāram vivekajaṃ pītisukhaṃ pathamam jhānam upasampajja viharati. (Vism. p. 139, 7ff-9ff, PTS1920); 第二禪 dutiyaṃ jhānam: Ettāvatā c'esa: – vitakkavicārānaṃ vūpasamā ajjhataṃ sampasādanaṃ cetaso ekodibhāvaṃ avitakkam-avicāram samādhijaṃ pītisukhaṃ dutiyaṃ jhānam upasampajja viharati. (p. 155, 28ff-30ff); 第三禪 tatiyaṃ jhānam: Ettāvatā ca pan'esa pītiyā ca virāgā upekkhako ca viharati, sato ca sampajāno sukhañ ca kāyena paṭisaṃvedeti, yaṃ taṃ ariyā ācikkhanti upekkhako satimā sukhavihārīti, tatiyaṃ jhānam upasampajja viharatīti. (p. 159, 10ff-13ff); 第四禪 catutthaṃ jhānam: Ettāvatā c'esa sukhassa ca pahānā dukkhassa ca pahānā pubb'eva somanassadomanassānaṃ atthaṅgamā adukkhamasukhaṃ upekkhā-satipārisuddhim catutthaṃ jhānam upasampajja viharati. (p. 165, 8ff-11ff); 五種禪の定義 Pañcakajjhānam pana nibbattentena paṇḍapathamajjhānato vuṭṭhāya.....punappunaṃ manasikaroto vuttanayen' eva dutiyaṃ jhānam uppajjati. Tassa vitakkamattam eva pahānaṅgam, vicārādini cattāri samannāgataṅgāni. ....punappunaṃ manasikaroto, vuttanayen' eva tatiyaṃ jhānam uppajjati. Tassa vicāramattam eva pahānaṅgam, catukkanayassa dutiyajjhāne viya pīti-ādini tiṇi samannāgataṅgāni. Sesam vuttappakārameva. Iti yaṃ catukkanaye dutiyaṃ, taṃ dvidhā bhinditvā pañcakanaye dutiyañ ceva tatiyañ ca hoti. Yaṇi ca tattha tatiyacatutthāni, tāni'dha catutthapañcamāni honti, paṭhamaṃ paṭhamam evā ti. (Vism. p. 168, 31ff-169, 27ff).

<sup>132</sup> 例えば、『雜阿含經』の第 343 經。T2, no. 99, p. 97a7-15.



の五種禪の第二禪に該当する。

是修果者，是四支五支禪果。……所覺者是欲界初禪。所觀者，是中間禪。所行者，是上三禪。<sup>133</sup>

『仏説十二門經』、『仏説解十二門經』における「四つの禪」の定義からみれば、「四種禪」「五種禪」「覺觀」との対応関係を示すと、次の表のごとくである。

四種禪	五種禪	覺觀との関係	『仏説解十二門經』の「四つの禪」
第一禪	第一禪	有覺有觀	一禪（有念有待）
（中間禪）	第二禪	無覺有觀	二禪（無念有待）
第二禪	第三禪	無覺無觀	三禪（無念無待） （但有歡喜）
第三禪	第四禪	捨喜	
第四禪	第五禪	捨念	四禪（歡喜滅） （喘息止）

『陰持入經』には「四禪」「無色正四定」などの九次定の用語が存在する。言い換えれば、「四禪」はすなわち一般的な「四種禪」を指す。したがって『佛説大安般守意經』における「相隨」の文中の「不待念」は、「無待無念」を意味すれば、「用不待念故為隨第二禪」の「不待念」は四種禪 catukkajjhāna の「第二禪」に該当すると思われる。『仏説解十二門經』の「四つの禪」は、『陰持入經』に説かれる四種禪とは異なって、すなわち五種禪に属する系統である。

すでに指摘したように『仏説解十二門經』文中の「待念」は『十二門經』の「念待」の同義語である。それで『佛説大安般守意經』における「相隨」の「不待念」の語は、「不念待」の誤写の可能性があると考えられる。

<sup>133</sup> T28, no. 1546, p. 370b6-13.

さらに「不念待」の意味は、「不念・待」→「不念・有待」であると見なされると、「不念待」は、『仏説解十二門經』の「四つの禪」の「二禪」と完全に対応できる。つまり、『十二門經』、『仏説解十二門經』、『新出安般經』、『佛説大安般守意經』は交互に密接な関わりを持つことからみると、「四禪」に対して、この四つの「經」は同一の定義を持つはずである。

だが、『佛説大安般守意經』の「①數時為念至十息為待」は「随」「息を数えない」と対照してみれば、「随」の「不待念」は、「不待・不念」という意味に該当すると考えられる。要するに、「数→念・待」、「随→不待・不念」は、「四種禪」の「第一禪→有念・有待」、「第二禪→無念・無待」と完全に対応できる。「数→第一禪」、「随→第二禪」という対応の解釈は格義的な解釈であるのはいうまでもないことである。

### （三）「家中念」と「家外念」

『佛説大安般守意經』と『新出安般經』にでた「相随」の定義を調べてみたら、矛盾するところが数箇所も見られる。

數息斷外，相隨斷内，止爲止罪，行觀却意，不受世間爲還，念斷爲淨也。<sup>134</sup>

數息斷外，相隨斷内，數從外入爲斷外亦欲離外因縁，數從中出爲欲離内因縁。<sup>135</sup>

數屬二事，一爲計出入息，二爲舍家中念，隨亦助成二事，一爲入息出息受想，二爲舍家外念。<sup>136</sup>

何用是隨？但從是斷外念。<sup>137</sup>

<sup>134</sup> T15, no. 602, p. 164b4-6.

<sup>135</sup> T15, no. 602, p. 165b25-27.

<sup>136</sup> 『新出安般經』，因TEXT, 65ff-67ff.

矛盾した箇所を次のとおりに示す。

	『佛説大安般守意經』	『新出安般經』
数息	断外	舍家中念
相随	断内	舍家外念

一の(二)で論じられたように、『新出安般經』の「六息念」は、『大毘婆沙論』、『阿毘曇婆沙論』の「六息念」と類似するから、食い違ったところを明らかにさせるために、『大毘婆沙論』、『阿毘曇婆沙論』の「数・随」の部分<sup>137</sup>を精査するのは必要である。

復次此中、數作二事、一能數入出息、二能捨耽嗜依尋、隨作二事、一能隨入出息、二能捨出離依尋。<sup>138</sup>

數有二事、一數入出息、二能捨思覺、隨有二事、一能隨入出息、二捨離欲覺。<sup>139</sup>

『新出安般經』、『大毘婆沙論』、『阿毘曇婆沙論』における「数・随」の捨について、互いの関わりは、次表の如くである。

	『新出安般經』	『大毘婆沙論』	『阿毘曇婆沙論』
数の捨	家中念	耽嗜依尋	思覺
隨の捨	家外念	出離依尋	離欲覺

これらの訳語の意味をみれば、「家中の念」 = 「耽嗜依の尋」 = 「思の覺」、また、「家外の念」 = 「出離依の尋」 = 「離欲の覺」という対応関係が見出される。すでに論じたように、安世高の「念・待」の訳語は「vitakka・vicāra」という原語に還元できる。『大毘婆沙論』『阿毘曇婆沙論』における「六息念の文」と対照してみると、『新出安般經』の「家中念」「家外念」の

<sup>137</sup> 『新出安般經』, 囿TEXT, 77ff-78ff.

<sup>138</sup> T27, no. 1545, p. 135a29-b2.

<sup>139</sup> T28, no. 1546, p. 105c25-27.

「念」の訳語は、明らかに尋伺の「尋」あるいは覚観の「覚」に該当する。さらに、「念」・「尋」・「覚」は「vitakka」の原語に還元できるとも考えられる。

要するに、『新出安般經』における「数・随」の定義は、『大毘婆沙論』、『阿毘曇婆沙論』とほぼ同趣旨であると見られる。一方、「數息斷外，相隨斷内」に関して、『佛說大安般守意經』では単に「數從外入為斷外」、「數從中出為（斷内）」という見方のみで解釈された。というのは、安世高が複雑な説明を意図的に避け、簡略な説明方法、いわゆる格義的な解釈をしたからである。

#### （四）「四禪」

周知されたように『佛說大安般守意經』の「數息=一禪」「相隨=二禪」「止=三禪」「觀=四禪」という組み合わせのような対応関係は、一見してインド仏教とはまったく無関係なさそうなことである。<sup>140</sup>ところが、調べてみると『佛說大安般守意經』以外に、このような解釈は『新出安般經』全文の最後には出てくる。<sup>141</sup>

また三の（一）節で論じたように、『十二門經』と『仏説解十二門經』には「念待（尋伺・覚観）」の「有無」をもとに、「四つの禪」が区別される。なお、『新出安般經』、『大毘婆沙論』、『阿毘曇婆沙論』における「六息念の文中」に数・随が vitakka（念・覚・伺）と密接な関わりをもっているとも書いてある。

那連提耶舍訳の『大集經』<sup>142</sup> および玄奘訳の『地藏十輪經』<sup>143</sup> にお

<sup>140</sup> デレアヌ フロリン（2004, p. 32）も指摘している。

<sup>141</sup> 図TEXT, 276-282.

<sup>142</sup> 『大方等大集經』：「數有二種作。一者依彼除覺觀。二者取出入息相。隨順亦二種作。一者依出（離）除覺觀。二者取（出）入息相。」T13, no. 397, p. 317b17-19.

<sup>143</sup> 『大乘大集地藏十輪經』：「應知此中數能造作二種事業，一能爲依伏諸尋伺，二

ける「六息念の「数」「随」の文中に、「覚と観と（すなわち vitakka と vicāra と、念と待と、尋と伺と）」は区別せずという見方も示している。

禅定に入るために、「vitakka・vicāra（念待・覚観・尋伺）」をコントロールすべきか、それとも棄てなければならないか。「六息念の文中」の「数・随」は確かに覚（観）を退ける役割をもっていると判明しながらも、「四つの禅」は「vitakka・vicāra（念待・覚観・尋伺）」と関わりを明確に定義されていないうえで、⊖「数・随」は「vitakka・vicāra（念待・覚観・尋伺）」とは確かになんらかの関わりをもっていると思われる。

それ故に、⊖『十二門経』と『仏説解十二門経』中の「念・待」の「有・無」によって、「四つの禅」が立てられる。⊖⊖はもともとインド仏教的な論点でありながらも、安世高は⊖⊖の論点に沿って「数随止観」と「四つの禅」とを組み合わせて、「數息為一禪，相隨為二禪，止為三禪，觀為四禪」という中国的（格義仏教的）解釈を作り出したとも考えられる。

## 小結

『新出安般経』における「相隨」と「數息」の文の形式は類似している。そのため、『佛説大安般守意經』の「相隨」の文は略されたと考えられる。『佛説大安般守意經』における「相隨」文中の「不待念」の「待念」は、すなわち『十二門経』文中の「念待 vitakka・vicāra」を指しているから、『新出安般経』の「数・随」の文中の「家中念」、「家外念」の「念」は「vitakka（覚・尋）」に還元できる。⊖『新出安般経』の「数・随」の文は「念待（覚観・尋伺）」と関わっている一方、⊖『十二門経』、『仏説解十二門経』の文中では「念待の有無」によって「四つの禅」が大別されている。先述したように、安世高は⊖⊖論点を働かせ「数随止観」と「四つの禅」とを組み合わせて、「數息為一禪，相隨為二禪，止為三禪，觀為四禪。」という格義仏

---

能取於入出息相。隨能造作二種事業，一依出離捨諸尋伺，二能善取入出息相。」 T13, no. 411, p. 730b15-18。

教的な解釈を作り出したと窺い知る。

## 四、「止」

『佛說大安般守意經』における「止」の文は次のごとくである。

A：①問第三止，何以故止<sup>144</sup> 在鼻頭，報用數息相隨止觀還淨，皆從鼻出入，意習故處亦為易識，以是故著鼻頭也。②惡意來者斷為禪，有時在鼻頭止，有時在中心止，在所著為止，邪<sup>145</sup> 來亂人意，直觀一事，諸惡來心不當動，心為不畏<sup>146</sup> 之哉也。③止有四，一為數止，二為相隨止。三為<sup>147</sup> 鼻頭止，四為息心止，止者謂五樂六入當制止<sup>148</sup> 之也。B：①入息至盡鼻頭止，〔謂〕惡不復入至鼻頭止。②出息至盡著鼻頭，〔謂〕意不復離身行向惡故著鼻頭，亦謂息初入時，便③一念向不復轉，息出入亦不復覺。④是為止也，止者如如<sup>149</sup> 出息入息覺知前意出，不覺後意出，覺前意<sup>150</sup> 為意相觀。便察出入息，見敗便受相，畏生死便<sup>151</sup> 却意，便隨道意相也。⑤莫為相隨者，但念著鼻頭，五陰因緣不復念，罪斷意滅，亦不喘息。⑥是為止也，⑦莫為相隨〔者。謂〕莫復意念出入隨五陰因緣，不復喘息也。<sup>152</sup>

144 止 = 正<sup>金</sup>。

145 邪 = 耶<sup>宋</sup>。

146 畏 = 動<sup>元</sup>明<sup>禮</sup>。

147 爲 = 者<sup>三</sup>。

148 〔止〕 — <sup>金</sup>。

149 〔如〕 — <sup>金</sup>。

150 意爲 = <sup>金</sup>爲意<sup>三</sup>。

151 〔便〕 — <sup>三</sup>。

152 T15, no. 602, pp. 166c14-167a2.

『新出安般經』における「止」の文は次のごとくである。

止爲何等，①入息至竟，遍止鼻頭。②莫隨。③出息至竟，著鼻頭。④莫隨。⑤是爲止，何用是止，但欲從是止念。<sup>153</sup>

『佛説大安般守意經』における「止」の文は A と B との二つの段落に分けられる。<sup>154</sup>

『佛説大安般守意經』の A 段落の①「止在鼻頭」は B 段の「鼻頭止」の趣旨に沿って説明していくのに対して、②には「止」を「在鼻頭止」と「在心中止」へと拡大解釈する。③は「數止」、「相隨止」、「鼻頭止」、「息心止」の四つの「止」へ一層広めて解釈を加えた。

『佛説大安般守意經』における「止」の B 段落の文は『新出安般經』の「止」を素直に解釈するのに対して、A 段の文は同じく「止」のことを解釈しているが、①→②→③のように「止」に対する解釈を次第に拡大しつつ組織化されていくと思われる。要するに、B 段の文より、『佛説大安般守意經』の A 段のほうはやや遅れて後日に加えられたものであると察する。

『佛説大安般守意經』の B 段落の主な文に、『新出安般經』における「止」と対応できる用語は次のとおりである。

『佛説大安般守意經』	『新出安般經』
①1 入息至盡，鼻頭止。	①入息至竟，遍止鼻頭。
②2 出息至盡，著鼻頭。→。	③出息至竟，著鼻頭。
④4 是為止也，⑥6 是為止也。	⑤是爲止。
⑤5 莫為相隨者，⑦7 莫為相隨者。	②莫隨，④莫隨。

それで、『佛説大安般守意經』の B 段落の⑥1、⑥2、⑥4⑥6、⑥5⑥7 と

<sup>153</sup> 因TEXT, 79ff-81ff.

<sup>154</sup> すなわち A 段は「問第三止……當制止之也」で、B 段は「入息至盡……不復喘息也」である。T15, no. 602, p. 166c14-21; T15, no. 602, pp. 166c22-167a2.

いう主な文はもとより『新出安般經』における「止」と対応できると推定された。言い換えれば、『佛說大安般守意經』における「止」の B 段落は『新出安般經』における「止」の文を解釈する文である。

## （一）「止」文の「本文」と「註」

### 1. 本文について

上述した両經を対照してみると、明らかに『佛說大安般守意經』の「㊦1 入息至盡。鼻頭止…㊦2 出息至盡。著鼻頭…㊦4 是爲止……㊦5 莫爲相隨…㊦6 是爲止…㊦7 莫爲相隨…」の文は、『新出安般經』の「①…入息至竟，遍止鼻頭。②莫隨。③出息至竟。著鼻頭。④莫隨。⑤是爲止。…」の文と完全に合致しているから、㊦1・㊦2・㊦4・㊦5・㊦6・㊦7 は本文であることが確認できる。

### 2. 註について

㊦1、㊦2、㊦4、㊦5、㊦6、㊦7 の本文に対し、次の箇所はそれらの注釈であると見られる。

㊦1…謂惡不復入至鼻頭止，㊦2…謂意不復離身行向惡故著鼻頭，亦謂息初入時，便㊦3 一念向不復轉，息出入亦不復覺，㊦4…止者如如出息入息覺知前意出，不覺後意出，覺前意為意相觀，便察出入息，見敗便<sup>155</sup> 受相，畏生死便却意，便隨道意相也，㊦5…但念著鼻頭，五陰因緣不復念，罪斷意滅，亦不喘息，㊦6…㊦7…謂莫復意念出入隨五陰因緣，不復喘息也。<sup>156</sup>

「註」には、㊦3 の「一念向」というキーワードが見られるうえで、

<sup>155</sup> この「受相」の前に、「不」の字が脱落したと推定される。

<sup>156</sup> T15, no. 602, pp. 166c22-167a2.



「一念向」は『陰持入經』の「一向念 *ekaggam cittassa*」の同義語<sup>157</sup> であると思われる。『新出安般經』に「一向念」、「一心向」が現われるのに対して、『佛説大安般守意經』ではそれと対応する「一念意」、「一心意」、「一意止」の用語が出てくる。これらの語は、「一念向」と同義語であると思われる。要するに、仏教伝来の最初期には、外来語を訳する漢訳の専門用語は未だ定着されていないわけである。

また、㊦4 の「受相」の語は、『陰持入經』にも見られ、PSSB と対照すると、*gahaṇalakkhaṇā* の原語に該当することがわかる。

*Saṅkhatānaṃ dhammānaṃ avināsaggahaṇalakkhaṇā niccasaññā.*<sup>158</sup>

為作彼所行法，不却受相，是為令墮有常想。<sup>159</sup>

*tassa sammāpaṭipatti padaṭṭhānaṃ. Saṅkhatānaṃ dhammānaṃ vināsaggahaṇalakkhaṇā aniccasaññā.*<sup>160</sup>

為令得止止所世間所行為所法，能（卻）<sup>161</sup> 受相，是為非常想。<sup>162</sup>

<sup>157</sup> *Tattha katamo samatho? Yā cittassa ṭhiti saṅṭhiti avatṭhiti ṭhānaṃ paṭṭhānaṃ upaṭṭhānaṃ samādhi samādhānaṃ avikkhepo avipparisāro vūpasamo mānaso ekaggam cittassa, ayaṃ samatho. Peṭakopadesa, p. 122, 11ff-14ff.* 『陰持入經』：「彼止名為意止。在處能止已止正止攝止不失止。不志心寂然一向念是名為止。」T15, no. 603, p. 176a10-12. 同義語といっても『陰持入經』の「一向念是名為止」の「止」は、*samatho* の止である。しかし、『佛説大安般守意經』の「止」の文中の「㊦3 一念向……㊦4 是為止也。」の「止」は、*samatho* の止でなく *sthāpanā* の「止（住）」である。これについては、『俱舍論』の次の「六息念」の原文をみると、よく判る。*sthāpanā nāma nāsikāgre yāvat pādāṅguṣṭhe sthitāṃ paśyati* (AkBh., 1967, p. 340, 5ff-8) 「止住というのは、鼻の先に乃至足の指に（念）とどめて（息を）観る。」

<sup>158</sup> *Peṭakopadesa, p. 121,2 3ff-24ff.*

<sup>159</sup> T15, no. 603, p. 175c28-29.

<sup>160</sup> *Peṭakopadesa, p. 127, 24ff-26ff.*

<sup>161</sup> パーリ語と漢訳とを対照してみれば、「能受相」に「却」の一字が脱落したと見られる。

<sup>162</sup> T15, no. 603, p. 177b3-4.

また、「却意」の語は、『十報法經』、『普法義經』、『阿毘曇五法經』、『仏説解十二門經』にも出てくる一方、「道意」は『七處三觀經』、「喘息」は『仏説解十二門經』にうかがえる。

要するに、それらのキーワードを確かめてみると、「止」の文にでる「註」は安世高自らの解釈であると思われる。

## 小結

『佛説大安般守意經』における「止」の文は『新出安般經』の「止」についての解釈である。A 段の文は後に加えられた解釈であるともいえる。一方、『佛説大安般守意經』における「止」の B 段の文は原始的な解釈文である。あらためて B 文の用語を考察すると、「本文」は「註」とともに安世高本人の敷衍したものに相違ない。

## 五、「觀」

『佛説大安般守意經』において、本文と註を区別するのは確かに容易なことではないと思いながらも、あえて分けてみたら、いくつかの手掛かりを割り出してきた。同經の「觀」の解説を考察して得た手掛かりとして、本文と註について改めて考えてみる。

第四觀〔者。〕觀息敗時與觀身體異息，見因緣生無因緣滅也。①心意受相〔者。謂〕意欲有所得，心計因緣會當復滅，便斷所欲不復向，是為心意受相也。②以識因緣為俱相觀〔者。謂〕識知五陰因緣，出息亦觀入息亦觀，觀〔者謂〕觀五陰，是為俱觀，亦應意意相觀，為兩因緣，在內斷惡念道也。③觀出息異入息異〔者。謂〕出息為生死陰，入息為思想陰，有時出息為痛痒陰，入息為識陰，隨因緣起便受陰，意所向無有常用，是故為異，道人當分別知是，亦謂出息滅入息生，入息滅出息生也。④無有故〔者。謂〕人

意<sup>163</sup> 及萬物意起已滅，物生復死，是為無有故也。㊦非<sup>164</sup> 出息是入息，非入息是出息，非〔謂〕出息時意不念入息，入息時意不念出息，所念異故言非也。㊧中信〔者。謂〕入道中見道因緣信道。是為中信也。<sup>165</sup>

上記の引用部分は、㊦㊧㊨㊩㊪㊫の六つの説明文に分けることができる。

㊦心意受相〔者。謂〕意欲有所得，心計因緣會當復滅，便斷所欲不復向，是為心意受相也。

㊧以識因緣為俱相觀〔者。謂〕識知五陰因緣，出息亦觀入息亦觀。觀〔者謂〕觀五陰，是為俱觀，亦應意相觀，為兩因緣，在內斷惡念道也。

㊨觀出息異入息異〔者。謂〕出息為生死陰，入息為思想陰，有時出息為痛痒陰，入息為識陰，隨因緣起便受陰，意所向無有常用，是故為異，道人當分別知是，亦謂出息滅入息生，入息滅出息生也。

㊩無有故〔者。謂〕人意及萬物意起已滅，物生復死，是為無有故也。

㊪非出息是入息，非入息是出息，非〔謂〕出息時意不念入息，入息時意不念出息，所念異故言非也。

㊫中信〔者。謂〕入道中見道因緣信道，是為中信也。<sup>166</sup>

要するに、a の部分は「心意受相」、d の部分は「無有故」、f の部分は「中信」について述べた註、或いは解釈である。

---

163 意=竟㊦。

164 〔非〕—㊪。

165 T15, no. 602, p. 167a3-18.

166 T15, no. 602, p. 167a4-18.

また、㉑、㉒、㉓の三つの説明文に、最初の文が最後の文と対応していないが、それらの短文の趣意をさぐってみると、それぞれの文は一つの独立した註或は解釈文であるとわかる。すなわち、㉑は「識因縁為俱相觀」、㉒は「觀出息異入息異」、㉓は「非出息是入息、非入息是出息」についての註或は解釈である。

要するに、「第四觀」は、㉑-㉓の六つの小文の註、或は解釈文から構成されるものである。

『陰持入經註』のように、この段落には本文の小文がありながらも、「小文→註→小文→註」という解釈の形式は持っていない。それで、注釈の対象にされる経文（本文）の部分は次に述べた文であると推定できる。「心意受相……以識因縁為為俱相觀……觀出息異入息異者……無有故……非出息是入息。非入息是出息……中信也。」

この文は次の『新出安般經』の「觀」の文たる「受意念法想……分別俱想觀……无有故。觀入息異，出息異。……是時入息時，不是時出息時。是時出息時，不是時入息時……中相隨可。」とほぼ対応している。

觀爲何等，入息出息，分別俱相觀。①受意念法想，入息出息，爲色陰，入息出息更痛，爲受痛陰，入息出息覺，爲成思想陰，入息出息<sup>167</sup> 覺，爲受行陰，入息出息覺從念，是爲識盛陰，如是受陰想，已如是受陰想。②分別俱想觀，新新生滅，相離。③无有故。④觀入息異，出息異，入息因痛異，出息因痛異，入息思想異，出息思想異，入息覺異，出息覺異，入息從念識異，出息從念識異，是名爲微<sup>168</sup> 隨可，分別俱名，入息出息，色盛陰，入息出息更痛痒，痛痒盛陰，入息出息知爲思想，思想盛陰<sup>169</sup>，入息出息念作生死，生死盛陰，入息出息更識，識盛陰，如是受陰想，已如是受

167 [息] —㉑。

168 微=從㉑。

169 陰=陰陰㉑。

陰想，入息出息前後分別相觀。⑤是時入息時，不是時出息時，是時出息時，不是時入息時，是時入息更痛，不是時出息更痛，是時出息更痛，不是時入息更痛，是時入息知，不是時出息知，是時出息知，不是時入息知也，是時入息作，不是時出息作，是時出息作，不是時入息作也，是時入息識，不是時出息識，是時出息識，不是時入息識也。⑥中相隨可，名爲一行。<sup>170</sup>

上述した内容をまとめてみると、次のような対応が出てきた。また、それぞれの文の内容は主に「五陰」を觀察する対象であるとも一致している。

『佛説大安般守意經』	『新出安般經』
㉑心意 <sup>171</sup> 受相	①受意念法想
㉒以識因縁為俱相觀	②分別俱想觀
㉓觀出息異入息異者……㉔無有故	③无有故。④觀入息異，出息異
㉕非出息是入息，非入息是出息	⑤是時入息時，不是時出息時，是時出息時，不是時入息時
㉖中信	⑥中相隨可

## (一)「觀」の「本文」と「註」

### 1. 本文について

『佛説大安般守意經』、『新出安般經』における「觀」に類似する箇所を調べてみると、『佛説大安般守意經』における「觀」の「本文」は、「㉑心意受相……㉒為俱相觀……㉓觀出息異入息異者……㉔無有故……㉕非出息是入息。非入息是出息……㉖中信」であることが確認できる。

<sup>170</sup> 同TEXT, 82ff-104ff.

<sup>171</sup> この「受相」は『新出安般經』の「受意念法想」の「受想」と対応する。Hunglung Hung, “The Textual Formation of the Newly Discovered *An Ban Shou Yi Jing*,” pp. 123-143 を参照する。

## 2. 註について

「観」の本文に対し、「註」の箇所は、次の文のごとくである。

第四観〔者。〕観息敗時與観身體異息，見因縁生無因縁滅也，  
㉔……謂意欲有所得，心計因縁會當復滅，便斷所欲不復向，是為  
心意受相也。㉕……謂識知五陰因縁，出息亦觀入息亦觀，觀者謂  
観五陰，是為俱観，亦應意相観，為兩因縁，在內斷惡念道也。  
㉖……謂出息為生死陰，入息為思想陰，有時出息為痛痒陰，入息  
為識陰，隨因縁起便受陰，意所向無有常用，是故為異，道人當分  
別知是，亦謂出息滅入息生，入息滅出息生也。㉗……謂人意及萬  
物意起已滅，物生復死，是為無有故也。㉘……非謂出息時意不念  
入息，入息時意不念出息，所念異故言非也。㉙……謂入道中見道  
因縁信道，是為中信也。<sup>172</sup>

『佛説大安般守意經』における「観」の「本文」のみならず、「註」も『新出安般經』と極めて類似している。とりわけ『佛説大安般守意經』の㉖「観出息異，入息異〔者。謂〕出息為生死陰，入息為思想陰，有時出息為痛痒陰，入息為識陰，隨因縁起便受陰，意所向無有常用，是故為異。道人當分別知是。」の「本文」と「註」は、『新出安般經』の④「観入息異，出息異，入息因痛異，出息因痛異，入息思想異，出息思想異，入息覺異，出息覺異，入息從念識異，出息從念識異。」の文と比べてみれば、意味だけでなく、内容も大変類似するのも否めない事実である。それで、この注釈は安世高本人の解釈しか考えられない。

次に、『佛説大安般守意經』の㉙の「中信」を考察する。㉙「中信〔者。謂〕入道中，見道因縁，信道，是為中信也。」

『佛説大安般守意經』の「中信」に対して、『新出安般經』には該当する「中相隨可」の語が見られる。この二つの語は、いかなる意味であろうか。

<sup>172</sup> T15, no. 602, p. 167a3-18.

一の（二）で論じられたとおり、『新出安般經』の「数・随・止・觀・還・淨」という「六事」の文<sup>173</sup>は、『大毘婆沙論』の「数・随・止・觀・轉・淨」の「六事」の文と非常に類似している。<sup>174</sup> また、『新出安般經』の「還」は、『大毘婆沙論』の「轉」に該当するから、「轉」を一つの説として『大毘婆沙論』は次のように述べている。

有説，四種順決擇分亦是轉攝。<sup>175</sup>

『大毘婆沙論』には、六事と深く関わりをもつ四種順決擇分について、その実習の段階と対応する関係はもろもろの異説を唱えられてる。

六の「還」の考察では、『佛説大安般守意經』と『新出安般經』との「還」について、「見道の十五心」の段階と対応できると結論した。それに、『新出安般經』と密接に結びつく『修行道地經』「數息品」の文中には、<sup>176</sup>「觀」の段階に煖・頂・忍・世第一法を修習すると記されてある。それで、「觀」は見道前の「四種順決択分」の段階と対応できると推定する。

「四種順決択分」と「信」との関わりについて、『大毘婆沙論』は次のように述べている。

復次煖得緣諦下信，頂得緣諦中信，忍得緣諦上信故，復次煖得緣諦信，頂得緣諦中信，忍得緣諦細信故。<sup>177</sup>

また、「數息品」からも修行者は忍法に至ったときに「信」を得るという。

---

<sup>173</sup> 因TEXT, 65FF-71FF.

<sup>174</sup> T27, no. 1545, p. 135a29-b9.

<sup>175</sup> T27, no. 1545, p. 135a25-26.

<sup>176</sup> T15, no. 606, pp. 217a28-218a8. 「數息品」中の「四種順決択分」の名称は、温和・頂法・法忍・世俗尊法となっている。

<sup>177</sup> T27, no. 1545, p. 24b1-3.

其忍何所趣，順趣順四諦，如審諦住，心\*以如是遂至<sup>178</sup> 清淨，是謂為信，雖爾獲此未成信根，以得是信身口心強，是謂精進，尚未能成精進之根，志向諸法是謂有心，未成念根，以心<sup>179</sup> 一志是謂定意，未成定根，其觀諸法分別厥義，是謂智慧，未成慧根，計是五法<sup>180</sup>，向于諸根未成道根，有念有想尚有所在，而見有遠<sup>181</sup> 未成定意，是謂上中之上世俗尊法。<sup>182</sup>

上に述べた文からみると、四善根を得ても、「五根」の「根」を獲得できるのはかぎったことではない。『新出安般經』には「還」の修習の目的は、「根」を得るためであると述べている。『新出安般經』の述べによれば、「數息品」とほぼ一致している。

是名爲還，何用是還？從是致得根也。<sup>183</sup>

『新出安般經』の文中には⑥「中相隨可」に対して、④「…微隨可」の語も見られる。上の『大毘婆沙論』の文を調べてみると、『新出安般經』の「微隨可」は『大毘婆沙論』の「下信」「僂信」、『新出安般經』の「中相隨可」は『大毘婆沙論』の「中信」に該当することは判明した。

要するに、『佛說大安般守意經』㊦の「中信」は、『大毘婆沙論』の「頂得緣諦中信」の「中信」<sup>184</sup> を指すというわけである。また、『佛說大安般守意經』では「中信」に対して「謂入道中，見道因緣，信道」と解釈する。

178 至=致㊦㊧。

179 心一=一心㊦㊧。

180 法=陰㊦㊧。

181 遠=燒㊦㊧。

182 T15, no. 603, pp. 217c24-218a7.

183 『新出安般經』，因TEXT, 120ff-121ff。

184 「中信」に関する詳しい論証は Hunglung Hung, “The Textual Formation of the Newly Discovered *An Ban Shou Yi Jing*,” pp. 123-143 を参照する。



そこで、「聖道に入る途中で見道の因縁であり、道を信ずる」の趣旨は、「頂法は四諦に縁じて中信を得る」という『大毘婆沙論』の「頂得縁諦中信」とは、ほぼ類似するといえる。

## 小結

『佛説大安般守意經』における「觀」の「本文」と「註」に関して、それらの文脈および用語を厳密に調べてみると、安世高本人の解釈であると確認できる。

現存する『佛説大安般守意經』と『新出安般經』(=『小安般經』=『安般守意經』)との関わりならば、後述した可能性をもっていると推定できる。

というのは、『小安般經』が既に訳されていたが、当時の人々にとってあまりにも難解なために、安世高は『小安般經』の一部を抜粋し、安般に関連する知識を新たに補足しなおしたのである。それに、『小安般經』から抜粋し敷衍したものを中間的な『安般經』とされ、後ほど陳慧の注義などをこの中間的な『安般經』に付け加え、ついに現存する『佛説大安般守意經』が仕上げられたに至ったという経緯である。

## 六、「還」

次に、『佛説大安般守意經』の「還」についての部分を考察してみよう。

㊦第五還棄結〔者。謂〕棄身七惡。㊧第六淨棄結者為棄意三惡，是名為還，還者為意不復起惡，惡者是為不還也。㊨還身〔者。謂〕還惡㊩得第五還尚有身亦無身，何以故，有意有身無意無身，意為人種，是名為還，還者謂意不復起惡，起惡者是為不還。㊪亦謂前助身後助意，不殺盜婬兩舌惡口妄言綺語，是為<sup>185</sup>助身，不

---

185 爲=謂㊨㊩。

嫉瞋恚癡，是為助意也。①還五陰〔者。〕譬如買金得石便棄捐地不用，人皆貪愛五陰得苦痛，便不欲是為還五陰也，何等為◎便<sup>186</sup>見滅盡處，〔謂〕無所有是為滅處，問已<sup>187</sup>無所有，何以故，為處者無所有處有四處，一者飛鳥以空中為處，二者羅漢以泥洹為處，三者道以無有為處，四者法在觀處也。②出息入息受五陰相〔者。謂〕意邪念疾轉<sup>188</sup>還正以生覺斷，為受五陰相，言受〔者。謂〕受不受相也，以受五陰相，知起何所滅何所，滅者為受<sup>189</sup>十二因緣，人從十二因緣生，亦從十二因緣死。③不念者為不念五陰也。④知起何所滅何所，〔謂〕善惡因緣起便復滅，亦謂身亦謂氣生滅，念便生不念便死，意與身同等，是為斷生死道，在是生死間<sup>190</sup>，一切惡事皆從意來也。◎今不為前前不為<sup>191</sup>今〔者。謂〕前所念已滅，今念非前念，亦謂前世<sup>192</sup>所作今世所作各自得福。亦謂今所行善非前所行惡，亦謂今息非前息，前息非今息也。⑤為生死分別者，為意念生<sup>193</sup>即生念滅即滅，故言生死，當分別萬物及身。⑥過去未來福為索盡，何以故，盡以生便滅滅便盡，\*已知盡當盡力求也。⑦視<sup>194</sup>上頭無所從來〔者。謂〕人無所從來意起為人，亦謂人不自作來者，為有所從來，人自作自得是為無所從來也。<sup>195</sup>⑧生死當分別〔者。謂〕知分別五陰，亦謂知分別意生死

186 便=處(元)(明)(禪)(觀)(修)。

187 已=以(金)(宮)(宋)\*。

188 轉=輒(金)。

189 〔受〕一(金)。

190 間=聞(宮)(禪)(觀)(修)。

191 不為=前不(元)。

192 〔世〕一(金)。

193 〔生〕一(金)。

194 視=觀(金)\*。

195 〔意起……從來〕十七字一(金)。

人意為常，知無有常亦為分別也。①後\*視無處所〔者。〕為今<sup>196</sup>現在，不見罪人在生死會，當得無有脫於罪故，言後視無有處所。①未得道迹。不得中命盡，〔謂〕已得十五意不得中死，要當得十五意便墮<sup>197</sup>道，亦轉上至阿羅漢也。②中得道<sup>198</sup>亦不得中命盡，為息意身凡三事，〔謂〕善惡意要當得道迹亦復中壞，息死復生，善意起復滅，身亦不得中死也。<sup>199</sup>

上記の文は、次のとおりに㊀㊁㊂㊃㊄㊅㊆㊇およびa) b) c) d) e) f) g) h) i) j) の文にわけるとする。分けられたそれぞれの文は、一つの註ないし解釈文になる。

㊀第五還棄結〔者。謂〕棄身七惡。

㊁第六淨棄結者為棄意三惡，是名為還，還者為意不復起惡，惡者是為不還也。

㊂還身〔者。謂〕還惡

a) 得第五還尚有身亦無身，何以故，有意有身無意無身，意為人種，是名為還。

還者謂意不復起惡，起惡者是為不還。

㊃亦謂前助身後助意，不殺盜婬兩舌惡口妄言綺語，是為助身，不嫉瞋恚癡，是為助意也。

b) 還五陰〔者。〕譬如買金得石便棄捐地不用，人皆貪愛五陰得苦痛，便不欲是為還五陰也。

c) 何等為便見滅盡處，〔謂〕無所有是為滅處，問已無所有，何以故，為處者無所有處有四處，一者飛鳥以空中為處，二者羅漢以泥洹為處，三者道以無有為處，四者法在觀處也。

<sup>196</sup> 今=念㊀。

<sup>197</sup> 便墮=使墮㊀, 便隨㊂㊃㊄㊅㊆㊇㊈㊉。

<sup>198</sup> 道+ (迹) ㊂㊃㊄㊅。

<sup>199</sup> T15, no. 602, p. 167a19-b29.

④出息入息受五陰相〔者。謂〕意邪念疾轉還正以生覺斷，為受五陰相，言受〔者。謂〕受不受相也，以受五陰相，知起何所滅何所，滅者為受十二因緣，人從十二因緣生，亦從十二因緣死。

⑤不念者為不念五陰也。

⑥知起何所滅何所，〔謂〕善惡因緣起便復滅，亦謂身亦謂氣生滅，念便生不念便死，意與身同等，是為斷生死道，在是生死間，一切惡事皆從意來也。

⑦今不為前前不為今〔者。謂〕前所念已滅，今念非前念，亦謂前世所作今世所作各自得福，亦謂今所行善非前所行惡，亦謂今息非前息，前息非今息也。

⑧為生死分別〔者。〕為意念生即生念滅即滅，故言生死當分別萬物及身。

⑨過去未來福為索盡，何以故，盡以生便滅滅便盡，已知盡當盡力求也。

⑩視上頭無所從來〔者。謂〕人無所從來意起為人，亦謂人不自作來者，為有所從來，人自作自得是為無所從來也。

⑪生死當分別〔者。謂〕知分別五陰，亦謂知分別意生死人意为常，知無有常亦為分別也。

⑫後視無處所〔者。〕為今現在，不見罪人在生死會，當得無有脫於罪故，言後視無有處所。

⑬未得道迹，不得中命盡，〔謂〕已得十五意不得中死，要當得十五意便墮道，亦轉上至阿羅漢也。

⑭中得道亦不得中命盡，為息意身凡三事，〔謂〕善惡意要當得道迹亦復中壞，息死復生，善意起復滅，身亦不得中死也。<sup>200</sup>

『新出安般經』の「還」についての部分は、次のごとくである。

<sup>200</sup> T15, no. 602, p. 534a19-b29.

①還爲何等。②還五陰。③知見滅盡處，入息出息，色<sup>201</sup> 盛陰，入息出息更痛，痛盛陰，入息出息念思想，思想盛陰，入息出息作行生死，生死盛陰，入息出息知識，識盛陰，如是④受陰想，已如是受陰想，從生死便滅受。⑤今有非前有，前有<sup>202</sup> 非今有。⑥分別觀生死。⑦見上頭，无息所從來。①作因有，不作盡无有。⑧分別生死。⑨後觀无有迹處。②作因有，已有便盡，不願向定，成度世已下<sup>203</sup>，正道出世間地。⑩未得道迹，會不得中命盡，要得道迹，是天下地，能得燒，能得壞，能得无，有得上，說行者。⑪不得中命盡，惡墮<sup>204</sup> 道，是名爲還，何用是還，從是致得根也。<sup>205</sup>

『佛説大安般守意經』の「還」と『新出安般經』の「還」の両者の関係については、次のような対応が見出される。

『佛説大安般守意經』	『新出安般經』
㉑ 還五陰	② 還五陰
㉒ 便見滅盡處	③ 知見滅盡處
㉓ 出息入息受五陰相	④ 受陰想
㉔ 今不為前前不為今	⑤ 今有非前有，前有非今有
㉕ 為生死分別	⑥ 分別觀生死
㉖ 視上頭無所從來	⑦ 見上頭无息所從來
㉗ 生死當分別	⑧ 分別生死
㉘ 後視無處所	⑨ 後觀无有迹處
㉙ 未得道迹。不得中命盡	⑩ 未得道迹。會不得中命盡
㉚ (中得道亦) 不得中命盡	⑪ 不得中命盡

201 色 = 也㉑。

202 [前有] —㉑。

203 下 = 不㉑。

204 惡墮 = 要隨㉑。

205 ㉑TEXT, 110ff-121ff.

『佛說大安般守意經』の㊶㊷㊸㊹は、『新出安般經』の内容に該当していないものの、新たに敷衍された文であると判明された。㊺の「知起何所滅何所〔謂〕」からでてきた文は、㊻の「以受五陰相，知起何所滅何所」の「知起何所滅何所」に対する注釈であるとも考えられる。また㊼の「不念〔者〕」からの文は、㊺の「念便生不念便死」の「不念」に対する注釈である。ところが、㊼という注釈の文が先行することがまず考えはしない。というのは『佛說大安般守意經』の文の仕組みが乱れているからである。

## （一）「還」の「本文」と「註」

### 1. 本文について

すでに論じたように、『佛說大安般守意經』における「還」の「本文」は、「㊶還五陰……㊷便見滅盡處。……㊸…受五陰相……㊹今不為前前不為今……㊺為生死分別……㊻視上頭無所從來……㊼生死當分別……㊽後視無處所……㊾未得道迹，不得中命盡。……㊿中得道不得中命盡……」である。

### 2. 註について

「還」の「本文」に対し、「還」の「註」は、次のごとくである。

㊶……譬如買金得石便棄捐地不用，人皆貪愛五陰得苦痛，便不欲是為還五陰也，何等為㊷……謂無所有是為滅處，問已無所有，何以故，為處者無所有處有四處，一者飛鳥以空中為處，二者羅漢以泥洹為處，三者道以無有為處，四者法在觀處也。㊸……謂意邪念疾轉還正以生覺斷，為受五陰相，言受〔者。謂〕受不受相也，以受五陰相，知起何所滅何所，滅者為受十二因緣，人從十二因緣生，亦從十二因緣死……㊹……謂前所念已滅，今念非前念，亦謂前世所作今世所作各自得福，亦謂今所行善非前所行惡，亦謂今息非前息，前息非今息也。㊺……為意念生即生念滅即滅，故言生

死，當分別萬物及身……㉔……謂人無所從來，意起為人，亦謂人不自作來者，為有所從來，人自作自得是為無所從來也。㉕……謂知分別五陰，亦謂知分別意生死人意為常，知無有常亦為分別也。㉖……為今現在，不見罪人在生死會，當得無有脫於罪故，言後視無有處所。㉗……謂已得十五意不得中死，要當得十五意便墮道，亦轉上至阿羅漢也。㉘……為息意身凡三事，〔謂〕善惡意要當得道迹亦復中壞，息死復生，善意起復滅，身亦不得中死也。<sup>206</sup>

上に述べたように註㉕の「買金得石」の譬えは、恐らく『道地經』の「止觀」に関する譬え<sup>207</sup>に由来するに違いない。㉔の「飛鳥」の語は、『七處三經』、『人本欲生經』、『道地經』、『阿含口解』にも見られる。㉖の文脈からみると、「受不受相」は、「受相・不受相」の意味で、㉔の「自作自得」は、『新出安般經』の㉑「作因有，不作盡无有」に該当すると思われ、さらに、『阿毘曇五法行經』<sup>208</sup>、『佛説罵意經』<sup>209</sup>の「作是得是」は『仏説十二門經』<sup>210</sup>の「行是得是」と同趣旨であるとも見られる。㉖の「十五意」は、すなわち見道の十五心を指す。

また、『佛説大安般守意經』の㉕「出息入息受五陰相」は、明らかに『新出安般經』の「入息出息，色盛陰，入息出息更痛，痛盛陰，入息出息念思想，思想盛陰，入息出息作行生死，生死盛陰，入息出息知識，識盛陰，如是㉔受陰想。」文から要約された文である。『佛説大安般守意經』は、『新出安般經』の「不願向定」に関してまったく触れていないから、『佛説大安般

<sup>206</sup> T15, no. 602, p. 167a26-b29.

<sup>207</sup> 『道地經』：「譬如買金家見金不觀試，如是應止，若持金試知，是金某國某處雜銅不真，知石色好醜長短圓方濡亦餘病，觀譬如是。」T15, no. 607, p. 235c4-6.

<sup>208</sup> 「何等為法，謂因緣作是得是是為法，當為識已識為却意當為斷。」T28, no. 1557, p. 998b7-8.

<sup>209</sup> 「如是為本無身意，但自作是得是。」T17, no. 732, p. 534b18-19.

<sup>210</sup> 「行是得是，便斷因緣，不行是不得是，便斷惡因緣，便得福，行道得道。」圓TEXT, 309ff-310ff.

守意經』を敷衍するときに安世高は三三昧を省略したと思われる。

また、『新出安般經』の

不願向定，成度世已下，正道出世間地。⑩未得道迹，會不得中命盡，要得道迹。……⑪不得中，命盡惡墮道。

という文は、『修行道地經』「數息品」の

則向無漏入於正見，度凡夫地，住于聖道，不犯地獄畜生餓鬼之罪，終不橫死，會成道跡，無願三昧而行正受。<sup>211</sup>

の文とも非常に類似する。

上述の調べによって、次のような対応関係が見られる。

『新出安般經』	「數息品」
不願向定	無願三昧而行正受
成度世已下	度凡夫地
正道，出世間地	住于聖道。⑩未得道迹
會不得中命盡，要得道迹，…⑪不得中命盡惡墮道。」	不犯地獄畜生餓鬼之罪，終不橫死，會成道跡。

この文は見道に対する記述であり、意味は次のようである。

「修行者が無漏たる無願三昧を得たときに、凡夫の位を超えて聖人の道に住するが、いまだ初果（道迹）を得ていない。見道を得てから初果に入るまでの間は、命が持ちつつあり、三悪道に落ちないで必ず初果に入る。」

一方、『佛說大安般守意經』は次のように述べている。

⑩未得道迹，不得中命盡，〔謂〕已得十五意不得中死，要當得十五意便墮道，亦轉上至阿羅漢也，中得道亦不得中命盡。<sup>212</sup>

<sup>211</sup> T15, no. 606, p. 218a15-17.



それで「見道に入ってから道迹（初果）を得ていない、ということは、見道の十五心を得るまでの間は行者のいのちが亡くならないで必ず道（迹）に入る。さらに次第に阿羅漢に至るのである。」と理解される。

文中の「転上」は、『新出安般經』の「有得上」に該当すると考えられる。つまり、『佛説大安般守意經』の「便墮道，亦轉上至阿羅漢也」は、「數息品」の「即成道跡會至聖賢，七反生天七反人間，永盡苦本。」<sup>213</sup> と同趣旨である。

## 小結

『佛説大安般守意經』における「還」の文の用語と意味は『新出安般經』と極めて類似するうえで、b c d e f g h i j k の「本文」と「註」は安世高本人の解釈に相違ない。

## 七、結論

『修行道地經』と違って、『新出安般經』の文は阿毘達磨の形式を持ちながら、説一切有部の論点も含めている。

また、『新出安般經』は「數息品」と極めて類似しているから、両經が深い関わりをもっているのは言うまでもない。一～六に述べた立論を根拠に、『佛説大安般守意經』の本文と見なされた箇所は、『新出安般經』にも出てくるから、「本文」と「註」は安世高本人の敷衍したものであると判明できる。

本来なら各自独立した「數・隨／vitakka・vicāra」と「四つの禪／vitakka・vicāra」を安世高は取り上げ、関わりをつけさせ、まったく独立した両説を組み合わせ、改めて論じなおした。そうすると「數隨止觀」と「四

---

<sup>212</sup> T15, no. 602, p. 167b24-26.

<sup>213</sup> T15, no. 606, p. 218c21-22.

つの禪」との組み合わせによって、「數息為一禪，相隨為二禪，止為三禪，觀為四禪」という格義仏教的な解釈を作り出したと思われる。

『小安般經』がすでに漢訳されていたが、当時の人々にとってあまりにも難解なため、安世高は『小安般經』の一部を抜粋し安般に関連する知識を新たに補足しなおした。それに『小安般經』から抜粋し敷衍したものを中間的な『安般經』とされ、後ほど陳慧の注義などを付け加え、ついに現存する『佛說大安般守意經』が仕上げられたに至った。本稿は全經のごく一部を取り上げ考察したものでありながらも、残りの部分は次の研究課題として論究することにする。

## 【略語】

本論文では主要テキスト・参考文献の版本に関する略語の説明は次の通りである。

### 1. Original works

(略語) (書名、訳者・編集者、出版等)

Ak Bh. = Abhidharmakozabhazya of Vasubandhu, ed. P. Pradhan, K. P. Jayaswal  
Research Institute, Patna, 1967 (TSWS8)

### 2. Original works published by The Pali Text Society (PTS)

Peṭakopadesa=Peṭakopadesa (1982)

PSSB=『Peṭakopadesa』の第六章「Suttatthasamuccayabhūmi 経義集の地」

Vism=Visuddhimagga (清浄道論), 1920

### 3. Periodicals, Serial Works and other Abbreviations

印仏研=印度學佛教學研究

PTS=The Pali Text Society, London.

T=『大正藏』=大正新修大藏經 (Taishō Shinshū Daizōkyō, Buddhist Tripiṭaka in Chinese)

㊦=『金藏』=趙城金藏 (1139-1173)

㊧=『高麗藏』(1236-1250)

㊨=『宮本』=宋・毘盧藏 (1113-1172 又は 1104-1148, 宮内庁書陵部所蔵本)

㊩=『宋本』=宋・資福藏 (1239, 増上寺所蔵本)

㊪=『元本』=元・普寧藏 (1277-1290 又は 1209-1286, 増上寺所蔵本)

㊫=『明本』=永楽北藏 (1410-1440)

㊬=『磧砂藏』(1231-1322 又は 1225-1350)

㊭=『南藏』=大明南藏 (1412-1417, 山東省済南図書館所蔵本)

㊮=『嘉興藏』=徑山藏 (1589-1676, 駒澤大学所蔵本)

新発見金剛寺本安世高訳『安般守意經』、『仏説十二門經』、『仏説解十二門經』 = 『金剛寺一切經の基礎的研究と新出仏典の研究』

（=落合俊典，2004=『報告書』）中公開的寫本影印）

☐TEXT=金剛寺新發見『仏説十二門經』写本（影印）

☒TEXT=金剛寺新發見『仏説解十二門經』写本（影印）

☑TEXT=金剛寺新發見『安般守意經』写本（影印）=善本=A本

Ⓢ=金剛寺新發見『安般守意經』写本（影印）=B本

#### 4. Database

CBETA=Chinese Electronic Tripitaka Collection Version 2008

## 引用文献

### 原典文献

- 『長阿含十報法經』。T1, no. 13。  
『雜阿含經』。T2, no. 99。  
『七處三觀經』。T2, no. 150A。  
『六度集經』。T3, no. 152。  
『大方等大集經』。T13, no. 397。  
『大乘大集地藏十輪經』。T13, no. 411。  
『佛説大安般守意經』。T15, no. 602。  
『陰持入經』。T15, no. 603。  
『修行道地經』。T15, no. 606。  
『道地經』。T15, no. 607。  
『法觀經』。T15, no. 611。  
『佛説罵意經』。T17, no. 732。  
『阿含口解十二因緣經』。T25, no. 1508。  
『阿毘達磨大毘婆沙論』。T27, no. 1545。  
『阿毘曇毘婆沙論』。T28, no. 1546。  
『阿毘曇五法行經』。T28, no. 1557。  
『俱舍論』。T29, no. 1558。  
『俱舍釋論』。T29, no. 1559。  
『順正理論』。T29, no. 1562。  
『出三藏記集』。T55, no. 2145。

### 中日文專書、論文

- デアヌ フロリン (1992)。「安世高譯『安般守意經』現行本の成立について」。『東洋の思想と宗教』9。pp. 49-63。  
デアヌ フロリン (1997)。「安世高国際会議に参加して」。『東方学』94。pp. 82-88。  
デアヌ フロリン (2003)。“The Newly Found Text of the *An ban shou yi jing* Trnaslated by An Shigao.” 『国際仏教学大学院大学研究紀要』6。p. 170-

133 (L) pp. 27-48。

- 大谷哲夫（1968）。「中国初期禅觀の呼吸法と養生説の『養気』について——安般守意經の流行をめぐって——」。『印仏研』 33。 pp. 142-143。
- 川島常明（1976）。「安般守意經について」。『印仏研』 24-2。 pp. 232-235。
- 水野弘元（1999）。『パーリ語辞典』。東京：春秋社。（1968 初版）
- 印順（1992）。『説一切有部為主的論書與論師之研究』。臺北：正聞出版社。（1968 初版）
- 吉岡義豊（1968）。「初期道教の守一思想と仏教——特に太平經を中心として——」。『大正大学研究紀要』 53。 pp. 61-84。
- 宇井伯壽（1983）。『譯經史研究』。東京：岩波書店。（1971 初版）
- 佐藤泰瞬（1929）。「修行道地經解題」。『国訳一切經』 經集部 4。東京：平文社。 p. 6。（2000 五刷）
- 村木弘昌（1979）。『釈尊の呼吸法——大安般守意經に学ぶ』。東京：柏樹社。
- 杜繼文（1998）。『安般守意經』。台北：佛光出版。（1997 初版）
- 林屋友次郎（1938）。「安世高訳の雜阿含と増一阿含」。『仏教研究』 1-1。 pp. 11-50。
- 松田慎也（1983）。「初期仏教における呼吸法の展開——安般念について」。『仏教学』 15。 pp. 49-68。
- 松田慎也（1989）。「修行道地經の説く安般念について」。『印仏研』 74, pp.18-23。
- 洪鴻栄（2002）。「『佛説大安般守意經』の研究——最初期格義仏教の解明——」。『立正大学大学院文学研究科大学院年報』 19。 pp. 135-144。
- 荒牧典俊（1971）。「インド仏教から中国仏教へ——安般守意經と康僧会・道安・謝敷序など——」。『仏教史学』 15-2。 pp. 1-45。
- 荒牧典俊（1993）。「出三蔵記集訳注」。『大乘仏典』 3。東京：中央公論社。 pp. 9-112。
- 荻原雲来（1986）。『漢訳対照梵和大辞典』。東京：講談社。（1940 初版）
- 落合俊典（2001）。「よみがえった中国仏教の〈原典〉——金剛寺で発見された安世高訳『十二門經』」。『大法輪』 2001年3月号。 pp. 132-135。
- 落合俊典（2002）。「『大安般經』と『小安般經』」。『印仏研』 101。 pp. 31-36。
- 落合俊典（2004）。『金剛寺一切經の基礎的研究と新出仏典の研究』。落合俊典（編）科学研究費補助金研（A）・（1）究成果報告書, 2004, pp. 206-228。
- 梶浦晋（2001）。「金剛寺一切經と新出安世高譯仏典」。『仏教学セミナー』 73。 pp. 25-43。

## 西文專書、論文

- Deleanu, Florin. 2003. "The Newly Found Text of the *An ban shou yi jing* Trnaslated by An Shigao." *Journal of the International College for Advanced Buddhist Studies* 6, pp. 170-133 (L).
- Hung, Hunglung 2007. "Continued Study of An Shigao's Works —The terminology of the *Mayi jing* T732 and the *Faguang jing* T611—." *Journal of Indian and Buddhist Studies* 112, pp. 122-127 (L).
- Hung, Hunglung, 2006. "The New Found Kongō-Ji Manuscript An Ban Shou Yi Jing and T602 Fo Shuo Da An Ban Shou Yi Jing—Analysis of T602 to Distinguish the Original Scripture from its Commentary—" *Journal of Indian and Buddhist Studies* 109, pp. 114-119 (L).
- Hung, Hunglung. 2008. "The Textual Formation of the Newly Discovered *An Ban Shou Yi Jing*." *The Chung-Hwa Buddhist Journal*. Vol. 21, pp. 123-143.
- Monier-Williams, M. 1999. *English-Sanskrit dictionary*. New Delli: Munshiram Manoharlal.
- Stefano, Zacchetti. 2002a. "On the Authenticity of the Kongōji Manuscript of An Shigao's Anban Shouyi jing 安般守意經." In *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the Academic Year 2001*, no. 5, pp. 157-158.
- Stefano, Zacchetti. 2002b. "An early Chinese translation corresponding to Chapter 6 of the Petakopadesa An Shigao's Yin chi ru jing T603 and its Indian origianl: preliminary survey." *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 65 (1), pp. 74-97.
- Stefano, Zacchetti 2003. "The Rediscovery of three Early Buddhist Scriptures on Meditation: A Preliminary Analysis of the Fo shuo Shi'er men jing, the Fo shuo jie Shi'er men jing Translated by An Shigao and Their Commentary Preserved in the Newly Found Kongō-ji Manuscript," *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the Academic Year 2003*, no. 6, pp. 251-299.
- Stefano, Zacchetti. 2004. "The Scripture on the Twelve Gates Preached by the Buddha." In *Basic Research on the Congō-ji Manuscript Cannon and a study of the newly found Buddhist Scriptures*. 『報告書』, pp. 238-231(L).

## To Distinguish Text from Annotations in “*Foshou Da Anban Shouyi Jing* T602”

Shi Guo-huei

Assistant Professor

Dharma Drum Buddhist College

### Abstract

“*Foshou Da Anban Shouyi Jing*” is very important material to use in a study of the early stages of Chinese Buddhism and Taoist interpreted Buddhism. The hand-written scripture “*Anban Shouyi Jing*”, discovered at Mt. Amano Kongō Temple in Kawachi Nagano City, Ōsaka Prefecture, Japan, represents an unprecedented turning point for the critical study of “*Foshou Da Anban Shouyi Jing*.”

There is another important issue that arises in the text of “*Foshou Da Anban Shouyi Jing*.” It is quite difficult to clearly distinguish the “main text” from “annotations”, since the text and annotations are mixed with each other. When trying to make a distinction between the relationship of these two scriptures, it is not only important to examine the corresponding relationship between the vocabularies used, but it is necessary to also closely examine the corresponding relationship between the meanings elaborated in these two scriptures.

The results of this study show that most of the contents that are assumed to be the “main text” of “*Foshou Da Anban Shouyi Jing*” also appear in the newly discovered “*Anban Shouyi Jing*”. The corresponding parts of these two scriptures bear a very close resemblance between the meanings elaborated and the vocabularies used. However, it is also true that there are points of terminological difference between the two texts. Therefore, we can infer that “*Anban Shouyi Jing*” has been interpreted a number of times in its history, and between the original version of “*Foshou Da Anban Shouyi Jing*” that has not yet been “paraphrased” (with paraphrases added) by Chen Huei, and the newly discovered version of “*Anban Shouyi Jing*”, an “intermediate version” of “*Anban Shouyi Jing*” should be identified. This “intermediate version” of “*Anban Shouyi Jing*” can be identified in the form of the newly discovered “*Anban Shouyi Jing*.” It is also very likely that the contents of this version also include the “plain and explicit” interpretations by An Shigao himself.



**Keyword:** An Shigao; *Da Xiao Anban Jing*; Jing (text); Zhu (annotation);  
ṣaṭ-kāraṇa